

栃木県埋蔵文化財調査報告第365集

頼朝塚古墳群

—快適な道づくり事業費（補助）

主要地方道宇都宮茂木線市塙工区に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2014. 03

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

より とも づか こ ふん ぐん
頼 朝 塚 古 墳 群

—快適な道づくり事業費（補助）
主要地方道宇都宮茂木線市塙工区に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2014. 03

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

序

頼朝塚古墳群は、栃木県の東部、芳賀郡市貝町に位置しています。町の東には起伏に富む八溝の山々を控え、西に流れる小貝川は、その支流とともに、豊かな芳賀の台地を形成しています。町内各所に残る遺跡は、この地が生活を営むのに適した場所であり、古くからの歴史が今日まで伝えられて来たことを物語っております。

このたび、主要地方道宇都宮茂木線の建設に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。その結果、古墳時代の円墳と方墳などが発見され、特に古墳時代の終わり頃に造られた方墳は、芳賀郡内では2例目となり、貴重な成果を得ることができました。また、同じ路線で調査した高林遺跡、前原遺跡は頼朝塚古墳群と同時代の遺跡であることが判り、これらは地域の歴史を知る上で、良好な資料であります。

本報告書は、その調査成果をまとめたものであり、本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました栃木県県土整備部、市貝町教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

栃木県教育委員会

教育長 古澤利通

例 言

1. 本書は、栃木県芳賀郡市貝町市境地内に所在する朝顔塚古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、快適な道づくり事業（補助）主要地方道宇都宮茂木線市境工区に伴う記録保存調査である。
3. 発掘調査は、栃木県県土整備部の委託事業として、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもとに、財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センターが実施したものである。整理作業・報告書刊行は、公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センターが行った。
4. 発掘調査から整理作業・報告書作成までの担当は次のとおりである。

発掘調査

平成 22 年度 平成 22 年 8 月 5 日～平成 23 年 3 月 30 日

調査第二担当 副主幹 塚本師也、嘱託調査員 宅間清公

整理作業・報告書作成

平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 27 日

整理課長 田代 隆、整理課 副主幹 津野 仁

5. 本書の執筆・編集は、津野が行った。
6. 写真撮影は発掘調査における遺構を塚本・宅間、遺物は津野が行った。
7. 表土除去は有限会社小林建設産業、基準点測量・調査範囲設定作業は東亜サーベイ株式会社・中央航業株式会社、航空写真撮影・測量図化は中央航業株式会社に委託した。
8. 発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたっては、次の機関からご指導・ご協力を賜った。
栃木県県土整備部・真岡土木事務所・市貝町教育委員会（順不同）
9. 発掘調査参加者は以下のとおりである。
池葉 力・宇塚悦美・大登 昇・亀田一六・菊池昭三・小島利三・坂本勝信・坂本仁一・篠原信子・鈴木和二・高島典子・高橋恭子・皆川和彦・皆川典男・皆川まさ子・森 秀昭・湯田仁淑・横山ナホ子
10. 整理作業・報告書作成参加者は以下のとおりである。
上野美紗子・君島みどり
11. 本遺跡の概要は、既に『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』・『埋蔵文化財センター年報』等で公表されているが、本書をもって正報告とする。
12. 本遺跡の出土遺物・記録類は、栃木県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1. 頼朝塚古墳群の略称は、「IK-YT」である。
2. 古墳の番号は、市貝町史編さん委員会編集『市貝町史 第1巻 自然・原始古代・中世』に従い、13号墳は、これに記載がないために追加番号とした。
3. 遺跡のグリッド配置図は、世界測地系の座標に基づき、その方位は座標北である。
4. 標高は、海拔標高である。
5. 遺構図の縮尺は各挿図に記した。遺物実測図の縮尺は石器 1/4、縄文土器・石器 1/3、鉄製品 1/2である。

目 次

序	
例言	i
凡例・目次	ii
挿図目次・表目次	iii
図版目次	iv
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
1. 調査の方法	
2. 調査の経過	
3. 基本土層	
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 発見された遺構と遺物	
第1節 頼朝塚古墳群	13
第2節 12号墳	15
(1) 位置と現状 (2) 墳丘 (3) 周溝 (4) 主体部 (5) 遺物の出土状況 (6) 出土遺物	
第3節 13号墳	25
(1) 位置と現状 (2) 墳丘 (3) 周溝 (4) 主体部 (5) 遺物の出土状況 (6) 出土遺物	
第4節 その他の遺構と遺物	31
1. 遺構	
2. 遺物 (1) 石器 (2) 縄文土器	
第4章 総括	35
第1節 出土土器の時期	35
1. 12号墳 (1) 須恵器甕 (2) 須恵器蓋・高台付坏	
2. 13号墳 (1) 関東地方などの窯出土資料 (2) 有稜壺の変遷と頼朝塚古墳群13号墳出土壺の時期	
第2節 鉄製の時期	40

1. 12号墳	
2. 13号墳	
第3節 栃木県内の方墳	44
(1) 大型方墳が単独で築かれる場合	
(2) 方墳の規模が大きくて円墳と群集する場合	
(3) 円墳と方墳の規模が均質で群集する場合	
(4) 墳輪のある後期の方墳	

挿図目次

第1図 主要地方道宇都宮茂木線路線図	2
第2図 頼朝塚古墳群 基本土層図	4
第3図 頼朝塚古墳群 位置図	5
第4図 頼朝塚古墳群 周辺の遺跡分布図	7
第5図 仁王地遺跡 6・7世紀住居跡全体図 - 1次・2次調査区 -	12
第6図 頼朝塚古墳群 分布図と出土勾玉	13
第7図 頼朝塚古墳群 12・13号墳位置図	14
第8図 頼朝塚古墳群 12号墳 墳丘測量図 (調査前)	15
第9図 頼朝塚古墳群 12号墳 墳丘測量図	16
第10図 頼朝塚古墳群 12号墳 墳丘土層図	17
第11図 頼朝塚古墳群 12号墳 周溝土層図	18
第12図 頼朝塚古墳群 12号墳 主体部平面図・土層図	19
第13図 頼朝塚古墳群 12号墳 遺物出土状況図	20
第14図 頼朝塚古墳群 12号墳 出土遺物実測図 (1)	22
第15図 頼朝塚古墳群 12号墳 出土遺物実測図 (2)	23
第16図 頼朝塚古墳群 13号墳 墳丘測量図 (調査前)	26
第17図 頼朝塚古墳群 13号墳 周溝土層図	26
第18図 頼朝塚古墳群 13号墳 墳丘測量図・土層図	27
第19図 頼朝塚古墳群 13号墳 主体部平面図・土層図	28
第20図 頼朝塚古墳群 13号墳 出土遺物実測図	30
第21図 頼朝塚古墳群 縄文時代土坑位置図・平面図・土層図	32
第22図 頼朝塚古墳群 石器実測図	33
第23図 頼朝塚古墳群 縄文土器実測図	34
第24図 竈跡出土の有椀壺 (1)	38
第25図 竈跡出土の有椀壺 (2)	39
第26図 竈跡出土の有椀壺 (3)	40
第27図 栃木県の集落出土鉄鏡—6世紀後葉から8世紀中葉—	41
第28図 頼朝塚古墳群 12号墳出土鉄鏡の類例と伴出品	42
第29図 栃木県出土鉄鏡の変遷・消長	43

第30図	多功大塚山古墳と多功南原1号墳	44
第31図	宮内古墳群	45
第32図	栃木県内の後期・終末期方墳	46
第33図	栃木県の後期の方墳	47

表目次

第1表	主要地方道宇都宮茂木線(芳賀・市貝バイパス)内遺跡一覧表	2
第2表	朝朝塚古墳群 周辺の遺跡一覧表	7
第3表	朝朝塚古墳群 12号墳 出土遺物観察表	23
第4表	朝朝塚古墳群 13号墳 出土遺物観察表	30
第5表	朝朝塚古墳群 石器観察表	33
第6表	朝朝塚古墳群 縄文土器観察表	34

図版目次

図版一	遺跡遠景・12号墳	図版四	13号墳 遺構
	朝朝塚古墳群 遠景(南上空から)		13号墳 近景(南上空から)
	朝朝塚古墳群 遠景(西上空から)		13号墳 主体部 天井石出土状況(北から)
	12号墳 全景(南上空から)		13号墳 主体部 天井石出土状況(南東から)
	12号墳・13号墳 全景(南上空から)		13号墳 主体部 礎出土状況(南から)
	12号墳 全景(北から)		13号墳 主体部 完掘(南から)
図版二	12号墳 遺構	図版五	13号墳 SK-03・04 遺構
	12号墳 全景(東上空から)		13号墳 主体部(南から)
	12号墳 全景(東から)		SK-03 セクション(西から)
	12号墳 周溝 土器出土状況(西から)		SK-03 完掘(西から)
	12号墳 南斜面 土器出土状況(南から)		SK-04 セクション(南から)
	12号墳 主体部 裏込め 粘土出土状況(南から)		SK-04 完掘(南から)
図版三	12号墳 遺構	図版六	12号墳 出土遺物
	12号墳 主体部 南北セクション(西から)		1～17
	12号墳 主体部 底面粘土分布状況(南から)	図版七	12号墳 出土遺物
	12号墳 主体部 裏込め(南から)		18～30
	12号墳 周溝セクション(西から)	図版八	12号墳 出土遺物
	12号墳 東西セクション(南から)		31
	12号墳 主体部 掘方完掘(西から)	図版九	13号墳 出土遺物
	12号墳 主体部 掘方完掘(南から)		1～11
	12号墳 勾玉出土状況	図版一〇	石器・縄文土器
			石器 1～4
			縄文土器 1・3・4・5

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

主要地方道宇都宮茂木線は、宇都宮市道場宿を起点として芳賀郡茂木町に至る幹線道路であり、県東部地域及び茨城県から宇都宮テクノポリス開発の拠点である鬼怒川東岸地域へのアクセス路として重要な役割を担う「交流促進型」広域道路でもある。

さて、本道路は宇都宮テクノポリス地区や祖母井土地区画整理事業及び住宅団地ヒルタウンあすみ野の開発により、交通量の大幅な増加が見込まれている。このため、交通渋滞を円滑に処理するために、そして、周辺の生活環境をより豊かに、安全で快適な街づくりにも貢献するために本路線の改築事業が計画された。主要地方道宇都宮茂木線（芳賀・市貝バイパス）整備計画区間は芳賀郡芳賀町大字下高根沢から市貝町大字市塚まで、計画延長は10.3kmである。

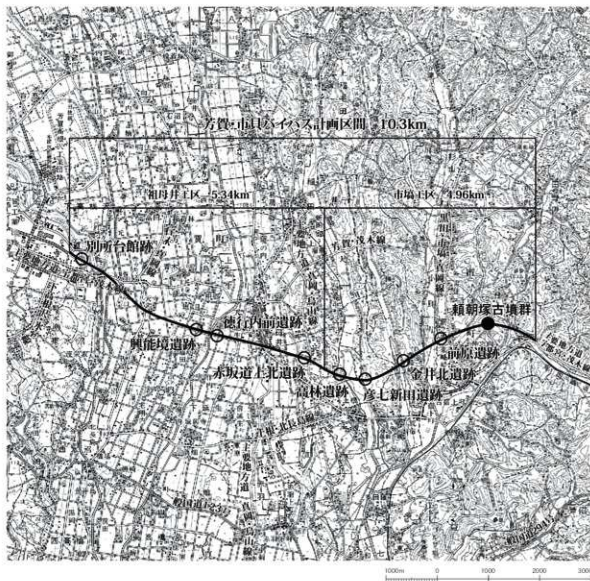
こうした状況下、平成7年度には県土木部道路建設課（現 県土整備部）から県教育委員会文化課（現 文化財課）へ本事業の照会が行われ、計画路線地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議が開始された。県文化課は、平成7・9・10年度に当該地区における遺跡の所在調査を行った。調査の結果、西から別所台遺跡・興能境遺跡・徳行内前遺跡・赤坂道上北遺跡（以上、芳賀町、祖母井土区）、高林遺跡・彦七新田遺跡・金井北遺跡・前原遺跡・頼朝塚古墳群（以上、市貝町、市塚区）の9遺跡が確認された。所在調査の結果を受け、県文化課は平成13・14年度に、頼朝塚古墳群を除く8遺跡の確認調査を行った。調査の結果、赤坂道上北遺跡・高林遺跡・彦七新田遺跡・金井北遺跡・前原遺跡は、埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。別所台遺跡・興能境遺跡・徳行内前遺跡は、確認調査の実施により、埋蔵文化財に係わる取り扱いを終了した。

これらの遺跡の発掘調査は、県土木部（現 県土整備部）が、県教育委員会に依頼し、県教育委員会は財団法人とちぎ生涯学習文化財団（現 公益財団法人とちぎ未来づくり財団）に委託し、埋蔵文化財センターが平成13年度から実施している。平成15年度までに赤坂道上北遺跡・高林遺跡・彦七新田遺跡、平成16年度に金井北遺跡・前原遺跡の発掘調査が行われた。

頼朝塚古墳群の1～12号墳は『市貝町史第1巻』や『栃木県埋蔵文化財地図』（平成9年3月、栃木県教育委員会刊行）にも掲載されている周知の遺跡であるが、13号墳は新規発見の古墳である。

本遺跡の調査及びその範囲の施工は、平成22年度当初には計画されていなかったが、年度中途に早期の工事着手の要請があり、調査を実施する方向となった。7月1日付けで県教育委員会文化財課長から財団あてに見積を依頼された。見積提出後の8月5日付けで、「頼朝塚古墳群発掘調査 快適な道づくり事業費（補助）主要地方道宇都宮茂木線市塚区に伴う発掘調査」として、県知事と財団法人とちぎ生涯学習文化財団理事長が委託契約を締結し、埋蔵文化財センターが調査を実施することとなった。調査対象面積は2,400㎡である。その後、10月中旬には年度中の2月末までに調査終了の方向で文化財課から協議を受けた。現地調査は23年1月後半から実施した。

整理作業・報告書作成作業は、平成25年度に実施することとし、4月1日付けにて、改称後の公益財団法人とちぎ未来づくり財団と契約書を締結し、発掘調査と同様に埋蔵文化財センターが業務を行うこととなった。



第1図 主要地方道宇都宮茂木線路線図

第1表 主要地方道宇都宮茂木線（芳賀・市貝バイパス）内遺跡一覧表

遺跡名	所在地	種類と時期	発掘調査年度	発掘調査面積 (㎡)
別所台館跡	芳賀町下高根沢字別所台	城館跡（中世）	-	-
興能境遺跡	芳賀町上延生字興能境	散布地（奈良～近世）	-	-
徳行内前遺跡	芳賀町上延生字徳行内前	集落跡（奈良～近世）	-	-
赤坂道上北遺跡	芳賀町祖母井字赤坂道上	集落跡（縄文）	平成14年度	3,300
高林遺跡	市貝町上根字高林	集落跡（古墳～平安）	平成13・15年度	7,600
彦七新田遺跡	市貝町上根字彦七新田	集落跡（古墳～平安）	平成13～15年度	28,000
金井北遺跡	市貝町上根	集落跡（奈良～中世）	平成16年度	5,400
前原遺跡	市貝町上根	集落跡（奈良・平安）	平成16年度	13,500
頼朝塚古墳群	市貝町市塙字添野	古墳（古墳）	平成22～23年度	2,400

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

発掘調査対象面積は2,400㎡である。調査範囲は、県教育委員会文化財課の確認調査により、周知の12号墳と新規発見の13号墳の墳丘及び周溝周辺の範囲で、2地点からなる。

調査前に両古墳の現況の墳丘測量図を作成する。世界測地系による座標を設定し、建設道路の幅杭を打設し、調査範囲・表土除去範囲を確定する。さらに、両古墳の位置を座標にのせる。

12号墳は墳丘が遺存しており、県文化財課による確認調査によって墳丘掘は掘削されていたことが判明していたので、周溝付近から外側は重機により表土除去を行う。13号墳は確認調査でも、墳丘が残っていないことが判明していたので、全体的に重機を使用した。

墳丘の表土は土層観察用のベルトを残して、人力で除去した。一部墳丘の土と表土の判別が困難なためにトレンチを設けて掘り下げた箇所もある。

主体部にはトレンチを各方向に設定し、土層を確認しながら掘り下げることにした。

13号墳は、県教育委員会文化財課のトレンチ調査で墳丘の残りの良くないことが判明していたために、現況での測量図を作成後に、重機で北半部の表土を除去した。その後、主体部を通して南北・東西にトレンチと土層観察用ベルトを設定して掘り下げることにした。

主体部の平面図を作成して、12号墳・13号墳の墳丘全体について測量図を作成することにした。

2. 調査の経過

調査は路線範囲を示す幅杭が設定されていなかったことから、真岡土木事務所所有の主要地方道宇都宮茂木線市塙工区の道路設計測量図の成果により、測量会社に委託して基準点測量を行った。発掘調査の範囲杭設定を平成23年1月11日から実施した。

その後、1月13日から12号墳の遺存する墳丘部分を除いて重機により表土除去を行った。併せて墳丘部分については、現況について平板により測量を実施した。

1月24日からは、古墳の周溝範囲の確認作業に移り、27日からは周溝の掘り下げや人力により墳丘の表土除去を行った。31日には周溝で須恵器甕がまとまって出土した。

2月2日からは、13号墳の主体部の掘り下げ作業に移った。2月10日からは、表土除去の済んだ12号墳で墳丘盛土土層観察のために、墳丘にトレンチを設定し、掘り下げを行った。さらに12号墳では2月17日から断ち割りにより主体部の確認調査に移行した。これ以降、両墳の主体部調査が中心になった。13号墳では、主体部の中から天井石と目される石が出土し、図化などを行った。

両古墳の主体部調査が一段落したため、3月6日には現地説明会を実施した。説明会終了後にも石室の調査を続けていたが、3月11日に東日本大震災が発生し、12号墳の墳丘土層観察用トレンチや主体部の壁が崩落した。

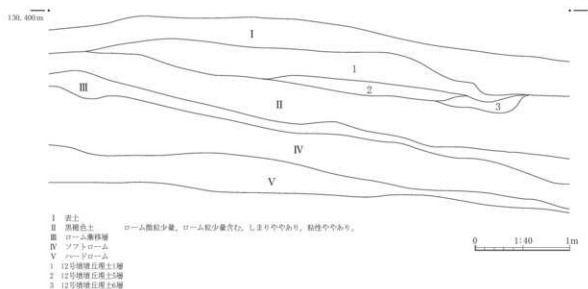
震災後は復旧作業の後に、航空写真撮影と図化を行い、最後に両古墳の断ち割り作業を実施した。作成した図面等を整理して、現地調査は3月25日に終了した。

整理作業は、平成25年4月2日から行った。現地で作成した測量図や土層図などの第二原図を作成し、挿図を作った。出土品の実測・トレース・挿図作成、及び原稿を作成して、割付後に印刷し、報告書刊行の運びとなった。

第1章 調査の経緯

3. 基本土層 (第2図)

町道際の掘削面において、丘陵上の基本土層を調査した。基本的には図示したように下層からハードローム、ソフトローム、ローム漸移層、黒褐色土、表土の順になる。なお、遺構確認はローム漸移層で行った。表土の厚さは場所により異なるが、30 cm前後であった。



第2図 頼朝塚古墳群 基本土層図



調査前の状況



遺構確認の状況



掘り下げ状況



出土遺物実測状況

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

頼朝塚古墳群は、栃木県南東部の芳賀郡市貝町に所在する。町域は南北約16km、東西9kmと、南北に長く、ほぼ全域が関東平野北東縁の台地・丘陵地帯に立地している。東側は、茨城県との境界に横たわる八溝山地に連なる。八溝山地は、南北にのびており、北部の八溝山（標高1022m）を最高位として、南に向かって標高300～500mの緩やかな地形となる。

町域の北・東・中央部は、八溝山地に連なる南那須丘陵によって構成される。この丘陵は、喜連川地域から連なる丘陵の一部で、那須烏山市鴻野山付近から市貝町市場へあたり、徐々に高度をさげながら続いている。

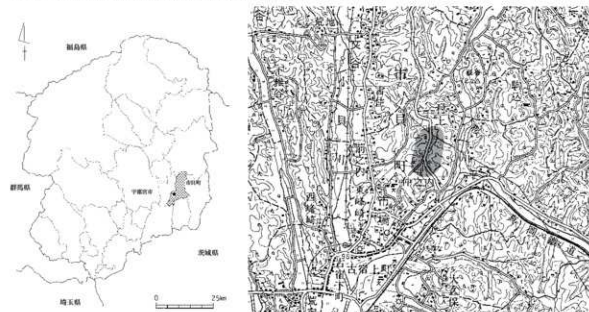
町域西部の平野部は台地・低地となっており、西側は鬼怒川支流の五行川が形成する低地に臨む。一方、南側は同様の丘陵地帯が続き、茨城県筑西市付近まで達している。また、町の中央には鬼怒川支流の小貝川が流れ、支流の小河川と共に南流して台地を南北方向に細かく刻んでいる。

丘陵地の中を流れる河川は、遺跡の東方では荒川が蛇行して那須烏山市の向田付近で那珂川に合流する。遺跡のある丘陵の西側では丘陵の間を東部に桜川、中央に小貝川、西部に大川が南北に流れている。桜川と小貝川は市貝町古宿下町付近で合流し、さらに南下して多田羅付近で大川と合流する。さらに小貝川は栃木県の東部を南下して、五行川と合流し、利根川へと続く。

これらの河川で開析された丘陵・台地・低地をまとめて地形学的にみると、喜連川丘陵・南那須丘陵・小貝川低地・稲毛田台地・祖母井台地・五行川低地・宝積寺台地などに区分される。

頼朝塚古墳群は、小貝川・桜川の合流域で、2本の川に挟まれた、幅1.2km前後の南北にのびた南那須丘陵上にある。標高では120～130m付近に立地している。

さらに仔細にみれば、小貝川にのびる沢が西峰崎から東峰崎にのびており、その間の丘陵の幅は0.7km程度である。小貝川・桜川の合流域には幅1km近い低地が広がっている。



第3図 頼朝塚古墳群 位置図

第2節 歴史的環境

本節では、小貝川・五行川上流域にほぼ相当する市貝町及び芳賀町を中心とした地域を対象とし、古墳時代から奈良・平安時代まで、時代毎に主要な遺跡について概観する。発掘調査が実施されたものや、遺構・遺物の状況から年代・性格等がある程度把握できる遺跡を中心に取り挙げた。

前節で述べたように、本遺跡の立地する稲毛台地や祖母井台地は、五行川や大川の支流によって開析され、舌状地形が発達している。稲毛台地東側の喜連川丘陵と、これに接した稲毛台地・祖母井台地や五行川西側の宝積寺台地東縁では縄文時代以降、開析谷に沿って多数の遺跡が分布する。これに対して五行川低地に面した低位台地や微高地に集落が形成されるのは古墳時代になってからであり、それ以前の遺跡は希薄である。

古墳時代

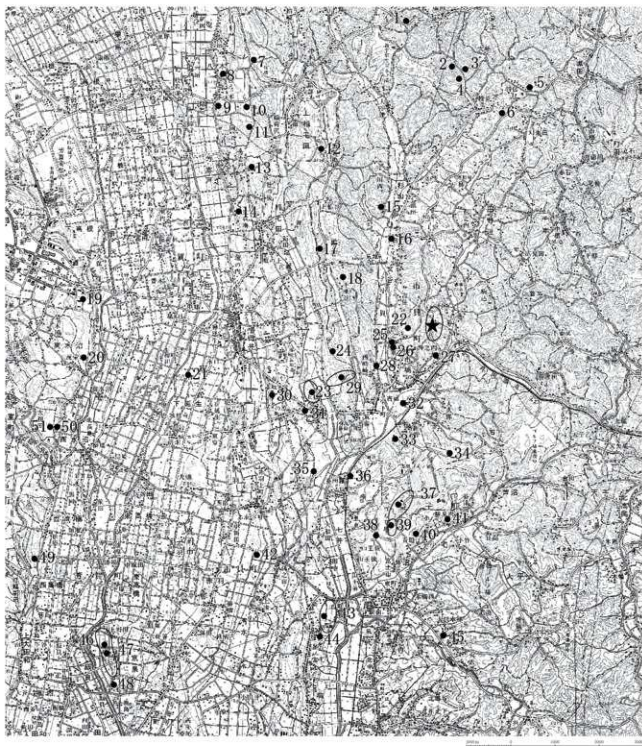
小貝川・五行川上流では、喜連川丘陵及び稲毛台地・宝積寺台地東縁に多数の古墳が分布する。その多くは6世紀以降に築造されたものであるが、まず前期の様相から述べる。

県北部の那珂川町湯津上や小川地区に、前期の大型前方後方墳が集中することは、全国的にもよく知られている。小川所在の駒形大塚古墳（墳丘長64m）、那須八幡塚古墳（墳丘長60.5m）、吉田温泉神社古墳（墳丘長47m）や湯津上の上侍塚古墳（墳丘長114m）、下侍塚古墳（墳丘長84m）はその代表であり、3世紀後半から4世紀にかけて那珂川西岸地域に相次いで築かれた大型首長墓と考えられる。

喜連川丘陵を隔てた芳賀地方にも、やや遅れて前方後方墳が出現する。小貝川流域では、喜連川丘陵上に上根二子塚1・3号墳（24）が存在する。その下流約6.5kmの稲毛台地東縁には星の宮浅間塚古墳（44）、さらに南方には山崎1号墳（分布図外：真岡市、墳丘長33.4m）が存在する。五行川流域では、野元川右岸の宝積寺台地に亀の子塚古墳（49：墳丘長56.3m）、五行川左岸の稲毛台地に八ッ木浅間山古墳（9：墳丘長57m）があり、この地域には一定の間隔を置いて中小の前方後方墳が分布している。このうち上根二子塚1・3号墳と山崎1号墳は発掘調査され、築造年代はともに4世紀前半代とされる。また、他の3基は未発掘だが、墳形等に共通点が多いとされ、あまり時期を隔てずに築造されたと考えられている。こうしたことから、当時の芳賀地方には小地域を基盤とする首長たちが各地に並立し、彼らの連合体として芳賀地方のまとまりが保たれていたと推測されている。

当時の集落遺跡としては、久保遺跡（42）、向北原遺跡（39）、谷近台遺跡（51）などが発掘調査されている。また、東秋場遺跡（14）、下椎谷遺跡（18）では古墳時代移行期の外来系土器なども出土し、この地方の古墳時代の始まりを考える上で貴重な資料を提供している。

久保遺跡は五行川低地に面した低位台地に立地しており、昭和56年度に実施された発掘調査によって、前期の堅穴住居跡24軒が発見された。遺物は調査区の外側にも散布しており、該期の大規模な集落跡と考えられる。そして、久保遺跡の南東約2.3kmには星の宮浅間塚古墳があり、両者の密接な関連が指摘されている。向北原遺跡は、小貝川支流である小宅川の沖積地に面した丘陵端部に立地する。昭和48年に調査が実施され、前期の堅穴住居跡15軒、方形周溝墓8基が発見された。方形周溝墓群は一边36mの3号墓を中心とし、最小で一边8mの4号墓など多様な規模で構成される。これらは、いずれも堅穴住居よりも新しく、比較的短期間で集落から墓へと移り変わったことが明らかにされている。この遺跡も星の宮浅間塚古墳に比較的近く、両者の関連を重視する見解がある。谷近台遺跡では昭和49年に実施された調査によって、7軒の前期の堅穴住居跡が発見され、東海地方に系譜を求められる土器が多数出土した。この集落の南方の台地には亀



第4図 類朝塚古墳群 周辺の遺跡分布図

第2表 類朝塚古墳群 周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	市町村番号	遺跡名	所在地	現況	立地	種別	時期	備考	
★ 2255	22	類朝塚古墳群	芳賀都市貝町市場宇道野	山林	丘陵尾根	古墳群	古墳	円墳12基、方墳1基、3・7・8号墳は墳丘西端、9号墳の石室(類朝塚古墳)。	
1	7212	5	電田坂火倉	芳賀都市貝町電田字西ノ丸	崖	付地盤の崖面	古墳	古墳後期	昭和7年調査見。後継行燈式が認め。
2	7214	17	長崎坂火倉跡	芳賀都市貝町長崎谷字長崎	崖	付地盤の崖面	古墳	古墳後期	昭和25年・56年発掘調査。
3	7215	26	上ノ原火倉跡	芳賀都市貝町長崎谷字上ノ原	崖	付地盤の崖面	古墳	古墳後期	3基確認。
4	7216	97	九重沢火倉跡	芳賀都市貝町長崎谷字九重沢	崖	付地盤の崖面	古墳	古墳後期	礎石・崩落が著しい。

第2章 遺跡の環境

3	7222	6	朝仏焼六基	芳賀郡市貝町向弘学バウナ穴	崖	台地裏の露出	古墳	古墳後期	掘削・発掘
4	7223	54	町生田古墳	芳賀郡市貝町町生田字節木	畑	丘陵・南斜面	古墳	古墳後期	昭和49年発掘調査。
7	2714	31	熊野塚古墳	芳賀郡芳賀町胎田字東中丸	山林	丘陵 南斜面	古墳	古墳後期	円墳4基から成る古墳群の土墳。墳丘直径21.0m。
8	-	69	八中内遺跡	芳賀郡芳賀町八中宇平八内北	田	丘陵上	甕土器遺布地	古墳中期	平成19年開田時に土師器埴輪出土。
9	-	79	八ツ木茂岡山古墳	芳賀郡芳賀町八ツ木富士山	神社	台地西端	古墳	古墳前期	前方後方墳。
16	熊田定35	-	大塚台古墳	芳賀郡芳賀町芳古戸字大塚台	山林	台地西端	古墳	古墳中期か	墳丘直径17.0mの円墳。
11	2721	82	塚平山古墳	芳賀郡芳賀町芳古戸字上岡	山林	丘陵西端	古墳	古墳中期か	墳丘直径43.2mの円墳。
12	2483	103	加々地遺跡	芳賀郡芳賀町上輪毛田字加々地	畑	台地	甕土器	古墳	古墳・古墳以降
13	2399	40	芳古戸十三塚古墳	芳賀郡芳賀町芳古戸十三塚	畑	台地	古墳	古墳	古墳
11	2403	16	東林遺跡	芳賀郡芳賀町芳古戸東林塚・東山	畑・平地	台地	甕土器	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	遺跡跡に町町番号「47」の民古墳群があり。
15	7242	41	八幡山遺跡	芳賀郡市貝町杉山字八幡山	山林・造成地	古谷台地 東麓斜面	甕土器 甕土器	縄文前期・古墳 奈良	昭和53年発掘調査。
16	7244	93	井戸尻遺跡	芳賀郡市貝町文谷字井戸中	保地	低台地	甕土器	縄文後・晩期 奈良・平安	
17	7250	25	種吾古墳群	芳賀郡市貝町種吾字平土山 他	山林	丘陵尾根	古墳群	古墳群	7号墳は前方後円墳。他は円墳21基。
18	7249	86	下榎台遺跡	芳賀郡市貝町種吾字五里	保地	丘陵西側 平谷面	古墳・古墳群	古墳	
19	2411	8	免の内台遺跡	芳賀郡芳賀町東水部字免の内台	畑	台地	甕土器	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	昭和56～平成元年発掘調査。
20	2412	29	藤山古墳群	芳賀郡芳賀町東水部字免の内台	田・畑	台地	古墳群	古墳群	1号墳は前方後円墳。8号・藤山古墳。他は円墳4基。
21	-	-	作内遺跡	芳賀郡芳賀町下延生字作内	田	平地	甕土器	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	
22	7254	23	諏訪塚古墳群	芳賀郡市貝町市崎字諏訪	山林	丘陵	古墳群	古墳群	1号墳は前方後円墳。8号・諏訪塚古墳。他は円墳3基。
23	7248	3/49	高林遺跡	芳賀郡市貝町上根字高林	水田	台地 東斜面	古墳群	石石器 古墳・平安	稲穂・番手遺物・市貝町・町町番号83。昭和50年・平成13年発掘調査。
24	7232	27	上根二子塚古墳群	芳賀郡市貝町上根字二子塚	農耕地・山林	丘陵尾根	古墳群	古墳	前方後方墳2基。昭和62年・平成3年発掘調査。
25	-	-	新原遺跡	芳賀郡市貝町上根	畑	台地	甕土器	縄文・古墳・奈良・平安	仁王地北端跡から発見。平成16年発掘調査。
26	-	-	仁王地遺跡	芳賀郡市貝町市崎	町野場・田	農古地	甕土器	縄文・古墳・奈良・平安・中世	平成5～6年町史編集委員会発掘調査。
27	7264	47	藤ノ水遺跡	芳賀郡市貝町市崎字藤ノ木	水田	川岸段丘	古墳	古墳中期	
28	-	-	金井北遺跡	芳賀郡市貝町上根	山林・畑	段丘	古墳	縄文・奈良・平安	西側跡1箇所と免内水遺跡を合わせて発掘調査に予定。
29	-	-	七新田遺跡	芳賀郡市貝町上根字七新田	山林	丘陵尾根	甕土器	古墳・平安	平成13・14年発掘調査。
30	2424	54	二子塚古墳	芳賀郡芳賀町免田字上野田	畑	台地	古墳	古墳	円墳・横穴式石室。
31	7275	48	新出古遺跡	芳賀郡市貝町上根字新出	保地	丘陵 南斜面	甕土器	古墳後期	昭和65年発掘調査。
32	7270	92	久保前遺跡	芳賀郡市貝町市崎字久保前	畑	小台地	甕土器	奈良・平安	昭和55年発掘調査。
33	7277	34	市場横塚古墳群	芳賀郡市貝町市崎字横塚	畑・山林	古谷丘陵斜面	古墳群	古墳	塚跡跡。1・3号墳は前方後円墳。1号墳の5号・1号墳は横穴式石室。1号・5号墳は横穴式石室。平塚。
34	7282	29	石下古墳群	芳賀郡市貝町石下字柳見沢	山林	尾根跡	古墳群	古墳	円墳1基。
35	7293	36	多出塚古墳群	芳賀郡市貝町多出字大御堂 他	山林	台地 東斜面	古墳群	古墳	円墳。
36	7292	95	多出塚遺跡	芳賀郡市貝町多出	畑	段丘	甕土器	奈良・平安	平成元年発掘調査。
37	2646	8	向北原古墳群	芳賀郡益子町七井字向北原 他	山林・ゴルフ場	丘陵上	古墳群	古墳	3・5号墳は前方後円墳。5号墳は横穴式石室。
38	2614	13	向北原南遺跡	芳賀郡益子町七井字向北原	養護学校	古谷台地 平谷面	甕土器	古墳後期。奈良・平安	昭和55・平成6年発掘調査。
39	3615	9	向北原遺跡	芳賀郡益子町七井字向北原	ゴルフ場	台地突端部	甕土器 甕土器	古墳	昭和48年発掘調査。
40	3618	7	小宅古墳群	芳賀郡益子町小宅字高嶺前・青田 他	山林・畑・平地	丘陵上	古墳群	古墳	1号・11号・14・21号墳は前方後円墳。20号墳は石室。山平塚古墳。
41	3520	6	西坪古墳群	芳賀郡益子町小宅字西坪 他	丘陵・畑・水田	丘陵 南斜面	古墳群	古墳	1号墳は横穴式石室古墳。3号墳は石室古墳。前方後円墳5基。別荘・長塚古墳。
42	7200	50	久保塚遺跡	芳賀郡市貝町赤羽字久保	水田	丘陵東端	甕土器	古墳前・後期。奈良・平安	昭和40・56年発掘調査。
43	4459	30	星の宮ケケ古遺跡	芳賀郡益子町崎字ケケナ	高校	丘陵東側 斜面	甕土器	奈良・平安	昭和50年発掘調査。
44	4615	31	星の宮浅塚古墳	芳賀郡益子町崎字星の宮	山林	古谷丘陵 頂部	古墳	古墳前期	前方後方墳。
45	4483	75	御堂前遺跡	芳賀郡益子町大沢字御堂前	畑	台地	甕土器	縄文・平安。奈良	平成10・12年発掘調査。
46	4422	53	新田田遺跡	高岡市京京字新田田	田	段丘	甕土器	奈良・平安	昭和40年発掘調査。昭和定史跡。
47	4423	24	京京シロ子原古墳群	高岡市京京	平地	台地	古墳群	古墳後期	塚跡跡。円墳。昭和定史跡。
48	4423	52	大内院寺跡	高岡市京京字内院。殿貝	田	台地	寺院跡	7世紀後半～8世紀後半	昭和定史跡。
49	3430	25	亀の子塚古墳	芳賀郡芳賀町西高橋字中塚	神社	台地東端	古墳	古墳前期	前方後方墳。芳賀町史編集に当たり墳丘直径10mと推定。
50	3417-1	20-1	綱枝塚古墳	芳賀郡芳賀町西水部字綱枝塚	田	台地東端	古墳	古墳中～後期	谷近古古墳群1号墳。8号・新塚古墳。昭和48年発掘調査。土俵部に施式石積。
51	-	316	谷近古遺跡	芳賀郡芳賀町西水部字綱枝塚 他	田	台地東端	甕土器	古墳前期	昭和49年・平成6年発掘調査。

の子塚古墳が立地する。同様な組合せは、東秋葉遺跡と八ッ木浅間山古墳、下椎谷遺跡と上根二子塚古墳群の間にも想定でき、当時の首長の勢力圏を考える上で、興味深い資料となっている。

中期になると、前方後方墳は築かれなくなり、5世紀半ばには現在の宇都宮市南部に大型前方後円墳の笹塚古墳（墳丘長100m）、塚山古墳（墳丘長95m）が相次いで出現する。県内の古墳の様相にも大きい動きがみられ、前方後方墳が盛んに築かれた県北には目立った古墳はみられなくなる。芳賀地方にも前方後方墳は築かれなくなり、替わって中期の円墳が出現する。

八ッ木浅間山古墳の周辺、大川右岸の稲毛田台地には、銭苧塚古墳（7：墳丘直径24m）、大塚台古墳（10：墳丘直径47m）、琴平山古墳（11：墳丘直径41m）、芳志戸十三塚古墳（13：墳丘直径25m）の中・大型円墳が1.0～0.5km程度の距離をおいて南北に分布している。このうち、すでに消滅した芳志戸十三塚古墳は、出土した石製模造品から唯一、5世紀中頃に位置付けられている（小森1989）。このことから、他の3基の円墳について中期古墳の可能性を指摘し、八ッ木浅間山古墳に続く前期首長系列との関連を想定する意見がある（橋本1999）。また、5世紀後半から6世紀初頭頃の円墳である錫杖塚古墳（50：墳丘直径20m）は、主体部に箱式石棺を持つ。

芳賀地方最初の前方向後円墳としては、5世紀後葉に位置付けられている真岡市大和日富士山古墳（秋元・斎藤1984）がある。五行川右岸の中流域に位置しており、前期の首長系列に連続する在り方でないことが指摘されている。

後期には小貝川・五行川上流域でも藤山古墳（20：墳丘長50m）、市場横塚古墳（33）1号墳（墳丘長52m）、向北原古墳群（37）8号墳（墳丘長42m）、といった前方向後円墳が築造された後、多くの群集墳が形成される。主として墳丘長40m以下の前方向後円墳を主墳とするものと、円墳だけで構成されるものがある。前者には諏訪塚古墳群（22）、椎谷古墳群（17）、小宅古墳群（40）などがあり、後者には石下古墳群（34）、多田羅古墳群（35）、京泉シトミ原古墳群（47）などがある。

椎谷古墳群は、小貝川支流である古郡川右岸の丘陵尾根上に立地し、南面して築造された墳丘29mの前方向後円墳と、21基の円墳から構成される。現在消滅した11号墳からは円筒埴輪、銅製剣などが出土した。小宅古墳群は、小貝川支流である小宅川右岸の丘陵上から南斜面にかけて立地しており、6基の前方向後円墳と29基の円墳から成る。前方向後円墳は墳丘長43mの12号墳が最大で、22mの21号墳が最小となる。20号墳は山守塚古墳と呼ばれる直径54mの大型円墳で、昭和60年に調査が実施された。主体部は切石切組の横穴式石室であったが、石材が周溝に投げ出された状態で出土し、築造後に比較的早い段階で破壊されたと考えられている。出土遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、7世紀前半頃の築造と推定されている。頼朝塚古墳群は、小貝川とその支流桜川に挟まれた丘陵上に立地しており、直径25mの9号墳が最大で、比較的小規模な円墳12基が確認されていた。消滅した直径約10mの3号墳からは、メノウ製の勾玉が出土している。石下古墳群は、小貝川とその支流桜川の合流付近の丘陵尾根上に立地しており、20基の円墳からなる。そのうち7基については発掘調査が実施されている。主体部には粘土床、凝灰岩切石積横穴式石室をもつものが確認され、14・16号墳からは豊富な副葬品が出土し、6世紀後半の造営と考えられる。多田羅古墳群は、稲毛田台東縁部に沿って分布する。直径30m前後の大型円墳（1・4・8号墳）を含む8基の円墳からなる。京泉シトミ原古墳群は、五行川低地の微高地に立地する点で注目される。かつて17基の円墳からなっていたと考えられるが、その半数以上は消滅した。13号墳の鶏塚古墳は、墳丘規模22m、南北18mの円墳である。昭和5・6年に調査が実施され、男子・女子の人物埴輪や鶏形埴輪の埴輪列が確認された。一方、小貝川上流に位置する直径30mの円墳である刈生田古墳（6）は、昭和40年に発掘され、

凝灰岩切石切組積みの石室が発見された。金銅製双龍文環頭大刀柄頭や鉄鏃、耳環、ガラス小玉などが出土し、6世紀末から7世紀初頭の築造と考えられる。

また、栃木県では、北東部の那珂川・荒川流域の丘陵地帯に横穴墓群の分布が見られる。分布の南端は芳賀地方にまで及んでおり、市貝町の塩田横穴墓(1)、長峰横穴墓群(2)、上立横穴墓群(3)、八重沢横穴墓群(4)、羽仏横穴墓(5)などが挙げられる。これらは、町北部の一部の範囲に存在し、小貝川支流が開析した喜連川丘陵の崖面に掘削されている。長峰横穴墓群は昭和55・56年に調査され、2群からなる25基の横穴墓が確認された。このうち7基に対しては発掘が実施され、前庭部を中心に土器類などの遺物が出土した。須恵器・土師器の示す年代は、8世紀前半代とされ、当横穴墓群の最終葬の時期と考えられる。

中期から後期の集落についてみると、中期の遺跡数は減少傾向にあり、後期に増加する。前期の比較的大規模な集落として知られる久保遺跡では、中期の堅穴住居跡は認められず、後期のものが43軒発見されている。前期の大規模集落が中期には一旦廃絶する傾向が看取されるのである。

中期の土器が出土している遺跡には藤ノ木遺跡(27)、八斗内遺跡(8)などがある。藤ノ木遺跡は、小貝川の支流、桜川の右岸段丘に立地しており、土師器小型甕2点が出土している。八斗内遺跡からは、土師器高坏4点、坏1点、埴1点などが開田の際に出土している。八斗内遺跡を含めた周辺の遺跡は、採集された遺物が少量であるため、遺跡範囲が小規模なものが多い(芳賀町教育委員会1999)。遺跡の保存状態が良好であることも考えられる。なお、八斗内遺跡の東側で一段高い台地上には、先述の中期の大型円墳の可能性が指摘されている銭苺塚古墳、大塚台古墳がある。更に北約3.8kmには、中期の堅穴住居跡が45軒が発見された砂部遺跡(分布図外:高根沢町)がある。

後期になると集落数は増加する。後期の集落は古墳群が造営される周辺で、沖積地に面した台地や丘陵に多数分布する。該期の遺跡として、高林遺跡(23)、彦七新田遺跡(29)、仁王地遺跡(26)、前原遺跡(25)、免の内台遺跡(19)、作内遺跡(21)、町出口遺跡(31)、加々地遺跡(12)、八幡山裏遺跡(15)などがある。

高林遺跡は、昭和51年に初めて調査が実施され、一辺7m前後と4.5m前後の堅穴住居跡が2軒ずつ発見された。その後、平成13・15年度に古墳時代後期から平安時代の堅穴住居跡89軒などが発見され、この地域の拠点集落であったことが判明した。彦七新田遺跡は丘陵尾根上に立地する。7世紀代に形成が始まり、9世紀代にピークを迎える丘陵上の大規模集落跡の様相が明らかにされた。この地域は丘陵が南北に細長く続いていることから、狭長な生産域を低地とし、集落を丘陵上に営む傾向があることが明らかにされた。

仁王地遺跡は、本古墳群の南西約1kmの位置にあり、6世紀後葉・7世紀前葉から9世紀まで続く大規模集落であり、古墳時代以降の堅穴住居跡が200軒以上発見された。7世紀前半から中葉の住居跡が多くて、本古墳群にも近い位置にあることから集落・古墳の関連が予測される。特に、6世紀前葉のJ6・2号住居では編み物石がまとまって出土しており、集落における生業を知ることができる。また、7世紀代の遺構からは、静岡県湖西産須恵器も確認されている。

前原遺跡は、丘陵裾から低地に向かう境に立地し、古墳時代後期から平安時代の堅穴住居跡18軒などが発見された。町出口遺跡では堅穴住居跡が2軒発見されている。周辺地域には古墳群を形成していたと考えられる二子塚古墳・二子塚西古墳(30)や町出口古墳などがあり、後期の遺跡・古墳が密集する。免の内台遺跡でも多数の住居跡が発見されており、宝積寺台地東縁に立地する該期の大規模集落として知られている。また、近年の調査では、2km程小貝川をのぼった位置で北ノ内遺跡・助五郎内遺跡などが調査され、古墳時代後期の堅穴住居跡も発見されている。

作内遺跡は甕・坏・鉢・甔の計10個体の土師器が出土している。五行川低地の微高地に立地する遺跡と

しては、数少ない発見例である。八幡山裏遺跡は、小貝川右岸の舌状台地に立地しており、昭和53年に実施された調査によって、7軒の堅穴住居跡が発見された。

奈良・平安時代

古墳時代までの遺跡は主に宝積寺台地、稲毛台地に分布していた。奈良・平安時代になると遺跡数が更に増加し、五行川低地に直面した台地・微高地にも久保遺跡のような大規模集落も形成されるようになる。古代芳賀郡の中心地は、小貝川・五行川中流域で、芳賀郡衙の堂法田遺跡(46)や都寺的性格の大内廩寺跡(48)の周辺である。

発掘調査により内容が確認された遺跡には仁王地遺跡(26)、免の内台遺跡(19)、井戸尻遺跡(16)、久保前遺跡(32)、多田羅遺跡(36)、久保遺跡(42)、星の宮ケカチ遺跡(43)、向北原遺跡(38)などがある。以下、主な遺跡の概要について述べる。

堂法田遺跡は昭和40年に発掘調査が実施され、礎石建物跡、掘立柱建物跡からなる38棟の建物群跡が発見された。建物群を区画する溝は発見されていないが、西側の地区に正倉の可能性のある建物が整然と並んでいることなどから、芳賀郡衙と推定される。

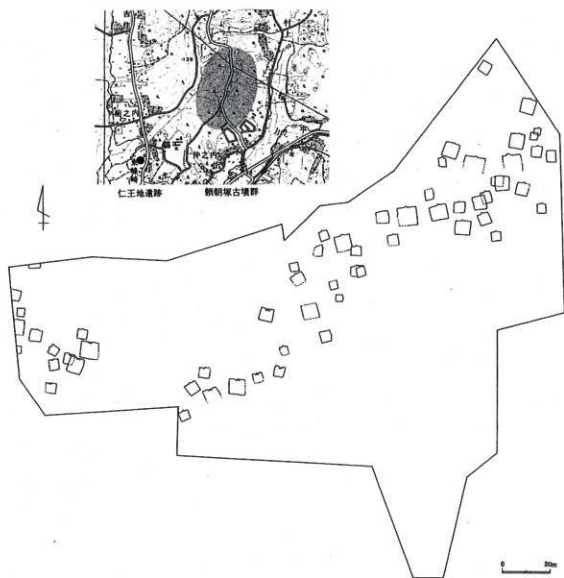
集落では、頼朝塚古墳群の近辺でも調査が進んでおり、仁王地遺跡・寺平遺跡・彦七新田遺跡・高林遺跡・前原遺跡・金井北遺跡・北ノ内遺跡・助五郎内遺跡などが挙げられる。

寺平遺跡は、平安時代の集落で、コの字形に25棟の掘立柱建物群が配され、この中に3軒の堅穴遺構がある。このような配置は地域有力者の居宅とみられる。さらに北ノ内遺跡でも、古墳時代後期から平安時代の堅穴建物跡33軒、大型掘立柱建物跡18棟などが発見された。このうち、大型掘立柱建物群では四面雨付きの建物もあり、寺平遺跡と同様の地域勢力者の居宅とみられる。金井北遺跡のように丘陵鞍部の小規模集落や彦七新田遺跡・高林遺跡のような大規模な集落など集落の性格も多様であり、堂法田遺跡の郡支配のもと、北ノ内遺跡や寺平遺跡のような地域支配勢力の遺跡、地域の大規模集落・小規模集落まであり、地域内の多様な集落形態と地域支配の実態が明らかになってきた。

参考文献

- 秋元陽光・斎藤 弘 1984「芳賀郡二宮町富士山古墳について」『栃木県考古学会誌』第8集 栃木県考古学会
 石部正志・中村紀男・小森紀男・北井 清 1992『上根二子塚古墳』市貝町教育委員会
 市貝町史編さん委員会 1990『市貝町史 第1巻 自然・原始古代・中世 資料編』市貝町
 市貝町史編さん委員会 1995『市貝町史 第4巻 通史編』市貝町
 岩渕一夫・植木茂雄 1993『免の内台遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
 小栗寿久・藤藤敏雄 2006『金井北遺跡・前原遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
 久保哲三・岩光和光 1986『益子・山守塚古墳』益子町教育委員会
 今平昌子 2003『高林遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
 小森紀男 1989「芳志戸十三塚古墳の検討」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会
 藤藤敏雄 2002「栃木県の後期古墳の地域性」『第7回東北・関東前方後円墳研究会大会 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
 藤藤敏雄 2006『高林遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
 竹澤 謙・田代 隆 1992『久保遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
 竹澤 謙ほか 1975『石下14号墳』市貝町教育委員会
 竹澤 謙ほか 1990『砂部遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
 中村信博 2009『仁王地遺跡発掘調査報告書』市貝町教育委員会
 中村紀男・関沢 昇 1979『井戸尻遺跡』市貝町教育委員会
 中村紀男ほか 1996『町出口・高林遺跡』市貝町教育委員会

- 中村紀男・中村哲也 1996『八幡山裏遺跡』市貝町教育委員会
 中村紀男・中村信博 2006「寺平遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 28 平成16年度(2004)』栃木県教育委員会
 中山 晋ほか 2011「北ノ内遺跡(第2次調査)」・「助五郎内遺跡」『埋蔵文化財センター年報』第21号(財)とらぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
 芳賀町教育委員会 1999『芳賀町遺跡分布調査報告書』
 芳賀町史編さん委員会 2001『芳賀町史 資料編』芳賀町
 堀 静夫 1983『芳賀町の遺跡』芳賀町教育委員会
 橋本澄朗 1986『向北原』益子町教育委員会
 橋本澄朗 1999「東国の中期古墳に関する二・三の問題」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
 日賀野宏・野崎 進・塚原孝一 1991『多田原遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木文化振興事業団
 平久保直希 2005『彦七新田遺跡』栃木県教育委員会・(財)とらぎ生涯学習文化財団
 藤田典夫 1989「栃木県市貝町下推谷の古式土師器」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会
 屋代方子 1984「堂法田(塔法田堂址)遺跡」『栃木県考古学会誌』第8集 栃木県考古学会



第5図 仁王地遺跡 6・7世紀住居跡全体図 - 1次・2次調査区 -

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 頼朝塚古墳群

本古墳群の調査は、関澤 昇氏が古墳の分布図を作成したのを嚆矢とする。関澤氏によって各古墳の規模などが計測され、本古墳群の全体が明らかになった。氏の調査によれば、古墳は丘陵の尾根筋に南北約700 m、東西約300 mの範囲に分布する。本古墳群は11基からなり、径4～22 m程の円墳を主体に構成され、9号墳が全長24 mの前方後円墳であると指摘している。この時は、11基の古墳が確認されたが、後に市貝町史編さんによる調査で、今回発掘調査を実施した12号墳が新たに発見・追加された。これによれば、12号墳は径約17.5 m、高さ1.1 mの円墳と記載されている。9号墳は、関澤氏が前方後円墳としているが、町史では帆立貝式前方後円墳の可能性を指摘している。

今回調査した13号墳は、11号墳の北側に位置し、関澤氏が調査した時期及び町史編さんの段階でも存在が確認できなかったことから、関澤氏が調査した昭和53年には既に墳丘が削平されていたと推測することができる。

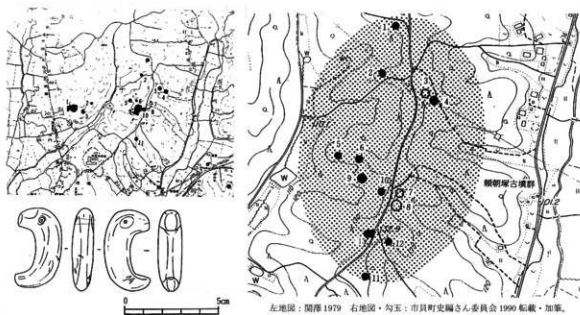
8号墳（頼朝塚古墳）と円墳1基は昭和42年頃に壊され、主体部の凝灰岩切石が出たという。石室からは人骨3体分と瑪瑙製の勾玉等が出土した。このうちの勾玉は、後に『市貝町史 第1巻』に実測図が掲載された。町史によれば、12基の古墳のうち8基の墳丘が遺存していたようである。現状は山林や畑となっている。

このような本古墳群の発見からの経緯を受けて、道路の路線内にかかる12号墳と13号墳の調査を行った。

参考文献

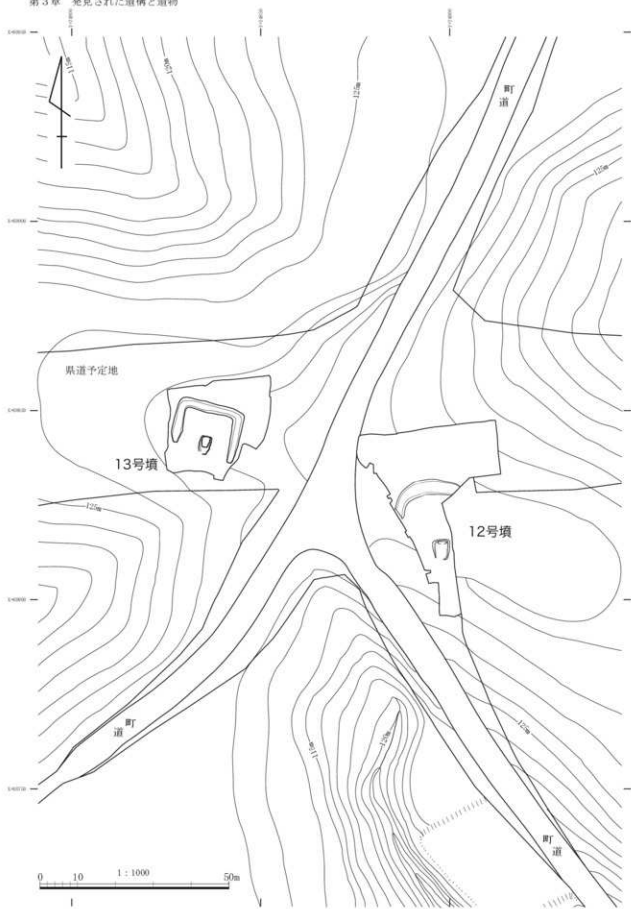
関澤 昇 1979『宇都宮大学内地留学研究報告書 小貝川上流域の古墳』

市貝町史編さん委員会 1990『市貝町史 第1巻 自然・原始古代・中世 資料編』市貝町



左地図：関澤1979 右地図・勾玉：市貝町史編さん委員会1990転載・加筆。

第6図 頼朝塚古墳群 分布図と出土勾玉



第7図 瀬朝塚古墳群 12・13号墳位置図

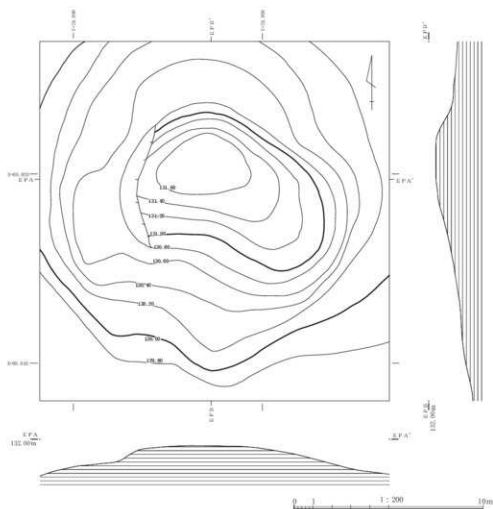
第2節 12号墳

(1) 位置と現状

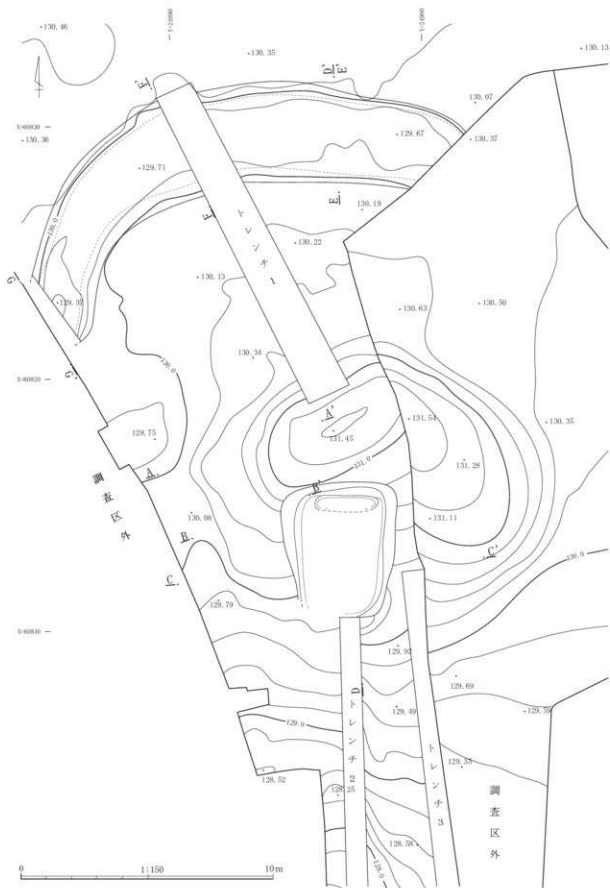
本古墳は、南西を向いた緩斜面に立地する。道路建設地は古墳の西側半分余りであったが、調査前に古墳全体の現況測量を行った。その結果、南北13m、東西14m程で平面楕円形、高さ1.7m程であった。本来円墳であったとすれば、南東側は比較的残りが良く、西側・南側は削られている部分が多いと推定される。南東から北西にのびる林道の掘削により、周溝の南西部は既に壊されていた。

(2) 墳丘 (第8～10図・図版一・二)

墳丘は、確認された周溝よりも5～6m程内側に確認できる。このため、周溝が確認できた墳丘北側では、ある程度墳丘土が流出しているか掘削されていたと考えられる。尾根側にあたる北・東側では墳丘の立ち上がり位置は明瞭であるが、斜面下方にあたる南・西側では墳丘も緩やかな傾斜になっており、トレンチ調査でも墳丘と丘陵の境は不明瞭であった。



第8図 頼朝塚古墳群 12号墳 墳丘測量図 (調査前)



第9図 頼朝塚古墳群 12号墳 墳丘測量図

主体部から西側にのびた土層図では、地山はソフトロームとその上の黒色土であり、この表土上に9～11層（にぶい黄褐色土・灰黄褐色土・明黄褐色土）を環状に盛っている。最下層の11層には、地山に含まれる今市バミス粒が含まれており、石室掘方の掘削土を墳丘に用いたと考えられる。その後6～8層（黄褐色土・明黄褐色土・黄褐色土）を積むが、この層は石室を構築しながら積み上げていったと推定される。墳丘土の積み方は、石室中央を南北にのびた土層図D-D'で、主体部の北側で黒褐色土とにぶい黄褐色土が互層になり、石室を構築しながら円錐状に土を盛っていたとみられる。土層図A-A'でもロームとほかの土を互層に盛っていることが確認できた。

(3) 周溝（第11図・図版三）

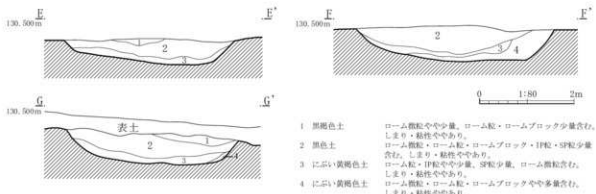
周溝は、本調査を行う前に文化財課による確認調査を行った。トレンチは墳丘北側で南東から北西に設定したもので、幅約80cmであった。道路路線部分については表土除去して、周溝を確認した。その結果、周溝は平面やや隅丸の円形を呈していた。溝の幅は確認面で2.6～4.0mで、底面での幅は1.3～3.0mであった。確認面からの深さは30～80cmである。壁の立ち上がりは墳丘の通しセクションを見ると、墳丘側では底から緩やかに立ち上がるが、外側では急傾斜になっている。墳丘南側ではトレンチを2本設けて、周溝の位置を確認したが、確認できなかった。

周溝の覆土は、上・中層でロームブロックやローム粒・ローム微粒を少量含む黒褐色土・黒色土であり、下層ではローム粒やローム微粒を上層よりも多く含んでいた。しかし、墳丘の流入土であると明確に判断することはできなかった。

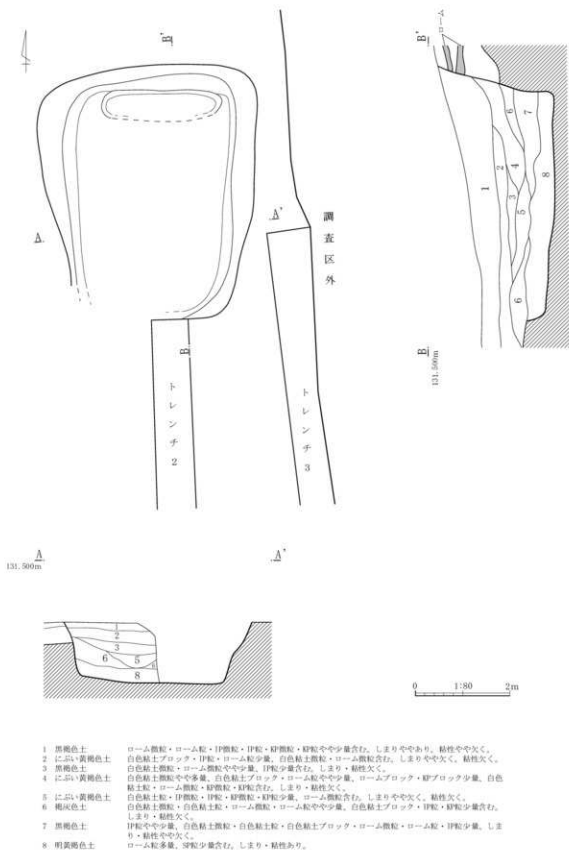
(4) 主体部（第12図・図版二・三）

現在残っている墳頂部よりも南側において主体部が発見された。石室を作っていた石材は全て既に取り出されて、著しく攪乱を受けており、掘方を確認できたのみである。掘方の規模は南北5.1m、東西3.6mで、平面長方形である。主体部平面図の最も外側の上端線は、盗掘の際の掘り込み範囲と判断したため、本来の主体部掘方線は外から2本目の線が上端であると考えた。

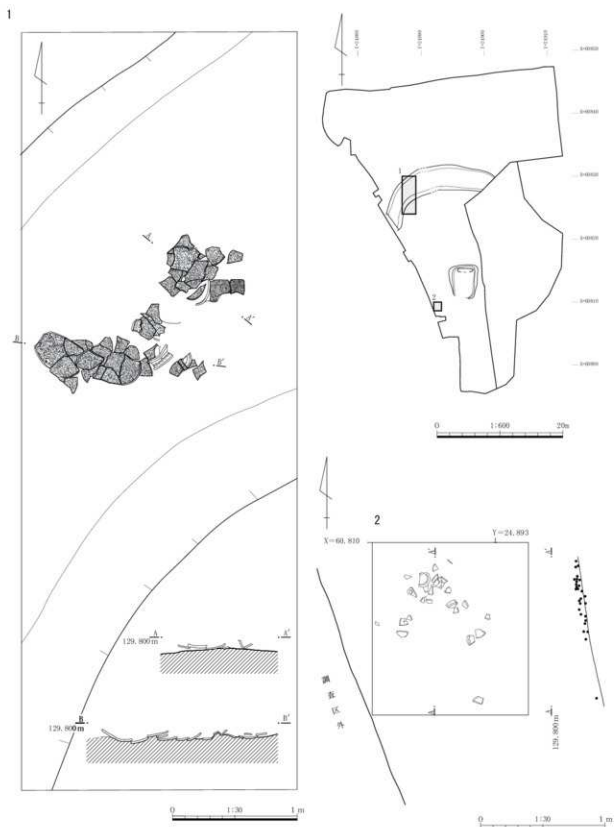
底面は地山のローム層を最も深い所で約1.3m平坦に掘り下げている。底面には、人頭よりも大きな凝灰岩片と粘土が奥壁から約5.15m南の位置まで確認できた。また、墳丘南面に凝灰岩の破砕礫が確認され、



第11図 頼朝塚古墳群 12号墳 周溝土層図



第12図 頼朝塚古墳群 12号墳 主体部平面図・土層図



第13図 頼朝塚古墳群 12号墳 遺物出土状況図

周辺に長大な河原石が存在しなかったことから、石室は凝灰岩切石積であったとみられる。

奥壁際の底面には南北幅約60cm、東西長約250cmの範囲で僅かな窪みが確認できた。この部分は奥壁の置かれていた部分と推定される。底面には広い範囲で粘土が確認できた。後述のように、裏込めに粘土が観察されたことから、盗掘時に裏込めから流れたものと推察される。

側壁は、掘方底面に深さ5cm程、平面長方形の窪みが確認されたが、震災により記録前に掘方壁が崩落して、図面を作成できなかった。石室の裏込めは、石材の抜き取り・盗掘により確認できる部分がほとんどなかった。掘方東壁の南北中程において残っていたが、図化前に崩落した。メモによると掘方底面から主体部確認面まで5層に分別できた。最下層から粘土を多量含む黒色土→粘土とローム層→ローム混じり黒色土→ローム多量混じる褐色土→鹿沼土混じる土となる。また、図化できなかったが、掘方の北東・北西隅付近において純粋な粘土が確認された。土層観察でも層状の土が観察されず、主体部の埋土は南北セクションによれば、最下層が平坦に堆積した後、壁際から三角堆積している。その土は、概ね黒褐色土とどがい黄褐色土とが互層状になっていた。このため、東側や北東・北西隅付近以外の北側・西側の裏込めについては、盗掘時に掘り返されたと考えられる。さらに、主体部内には底面から20cm程浮いた状態で人頭大の礫が出土したが、盗掘後に投棄されたものと推測される。

主体部の南側には約30cmの段が確認された。しかし、主体部土層図の6層は盗掘後の埋土とみられ、本来は30cm以上の段であったことも考えられる。なお、南北セクションや上面からの観察によっても段道は確認することができなかった。地形が南傾斜になっており、掘り込みが確認面に及ばなかった可能性も残る。

(5) 遺物の出土状況(第13図・図版二・三)

本古墳では、大きく2箇所から遺物が発見された。主体部の北側周溝内では、底面に接して大甕が破片となって出土した。破片の多くは内面が上を向いており、外面が上になっていたのはごく一部であった。破片は大きく西側と北東側にV字状に出土したが、胴部の左右半分ずつ別れて破片化していた。底部は穿孔されており、本来墳丘上にあったものが周溝内に入ったと推測される。

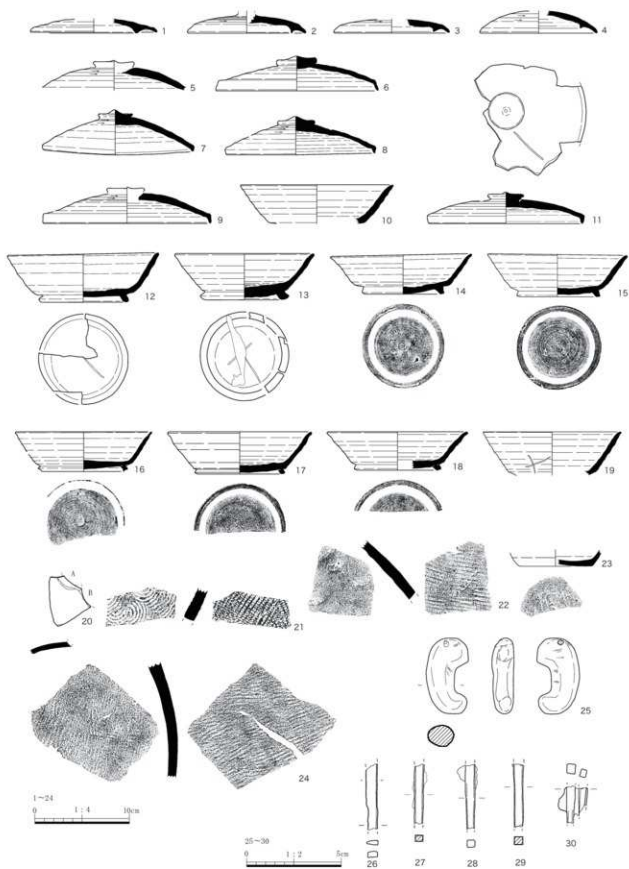
主体部南西の墳丘裾付近でも須恵器高台付杯・蓋が約1m四方の範囲からまとまって出土した。いずれも破片となっており、本来この場所に置かれたものであると断定はできない。鉄製品は墳丘南東部裾などから出土した。盗掘の際に石室から掻き出されたものであろうか。

このほかに、墳頂付近からも須恵器甕片や主体部南側から勾玉が出た。

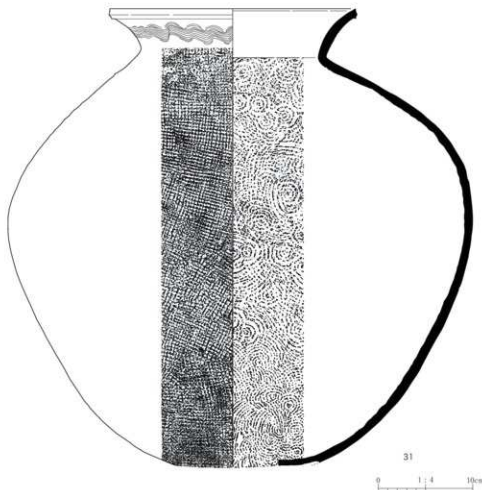
(6) 出土遺物(第14・15図・第3表・図版六～八)

須恵器大甕(31)口径25.6cm、高さ48.3cm、最大径48.5cmで、丸い底部を除き完形になった。外面は格子叩き、内面は同心円当て具痕が観察される。内面は底面から15cm程の範囲では、径6.0cm程の幅狭い同心円当て具を用いているが、これより上の胴中位・上位では径8.6cm程で、同心円の幅の広い当て具を用いている。このため、底部から胴部下位を成形後に別な工具で胴部中位・上位を成形したことがわかる。外面の格子叩きの工具の分別は不明瞭である。頸部は口縁部で後に9本単位の櫛状波状文1段を右から左方向に施している。口縁部には、平坦面と沈線がある。胴部上位と頸部内面、焚口側と判断される頸部・胴部全体に自然釉が付着している。産地は不明である。

底部は、外面に胎土の剥離面が観察されることから、焼成後(使用後)に内面から打撃を加えて穿孔したと推定される。穿孔部の径は短径8.7cm、長径11.1cmである。



第14図 頼朝塚古墳群 12号墳 出土遺物実測図(1)



第15図 頼朝塚古墳群 12号墳 出土遺物実測図(2)

第3表 頼朝塚古墳群 12号墳 出土遺物観察表

番号	種類 器種	計測値 (cm)	特徴	胎土	焼成・色調	残存	注記
1	須恵器 蓋	口径	(13.2) 内外面ロクロナデ。外面のヘラケズリは表面摩耗して不明。内面にかえりあり。三義産。	白色・黒色細粒少量。	不良。 内 2.5Y7/2 灰黄 外 2.5Y8/2 灰白	破片	12号墳墳丘南 No.16
		底径					
		器高					
2	須恵器 蓋	口径	(12.4) 内外面ロクロナデ。つまみ貼り付け(割離)。天井外面回転ヘラケズリ。内面にかえりあり。三義産。	白色細粒多量。 黒色細粒・白色粗粒少量。	良好。 内 7.5Y7/1 灰白 外 10Y6/1 灰	口~天井部 1/3 つまみ欠損	12号墳墳丘南 No.19, 墳丘南一括
		底径					
		器高					
3	須恵器 蓋	口径	(12.0) 内外面ロクロナデ。天井外面回転ヘラケズリ。内面にかえりあり。三義産。	黒色微粒多量。 白色粗粒微量。	不良。 内 2.5Y8/2 灰白 外 5Y8/2 灰白	口~天井部 1/6 つまみ欠損	12号墳墳丘南 No.18
		底径					
		器高					
4	須恵器 蓋	口径	(12.2) 内外面ロクロナデ。天井外面回転ヘラケズリか。内面にかえりあり。三義産。	白色細粒多量。 黒色細粒・白色粗粒少量。	不良。 内 2.5Y8/1 灰白 外 5Y8/1 灰白	口~天井部 1/4 つまみ欠損	12号墳墳丘南
		底径					
		器高					
5	須恵器 蓋	口径	内外面ロクロナデ。外面回転ヘラケズリ。つまみ基部挿入。ロクロナデ(割離)。産地不明。	白色微粒多量。 白色細粒少量。 白色粗粒微量。	良好。 外 7.5Y8/0 焼灰 外 5Y8/1 焼灰	天井部 1/4	12号墳墳丘南
		底径					
		器高					
6	須恵器 蓋	口径	17.0 内外面ロクロナデ。外面天井回転ヘラケズリ。つまみ貼り付け。ロクロナデ。窯詰めは交互積み上げ法。益子産。	白色細粒多量。 白色粗粒少量。 小礫微量。	良好。 内 N5/0 灰 外 N4/0 灰	口~体部 1/2 つまみ~天井部 完存	12号墳墳丘南 No.4, 6, 12, 26, 南斜面。南坂遺物集中区
		底径					
		器高					
7	須恵器 蓋	口径	16.1 内外面ロクロナデ。内面中央押圧痕。外面回転ヘラケズリのち。つまみ貼り付け。ロクロナデ。三義産。	白色微粒・黒色微粒多量。 白色粗粒少量。	良好。 内 2.5Y6/2 灰黄 外 5Y7/2 灰白	ほぼ完存	12号墳墳丘南
		底径					
		器高					
8	須恵器 蓋	口径	(15.8) 内外面ロクロナデ。内面中央にナデ。外面回転ヘラケズリのち。つまみ貼り付け。ロクロナデ。ゆがみあり。三義産。	白色微粒多量。 黒色微粒・白色粗粒少量。 小礫微量。	良好。 内 5Y5/2 灰オリーブ 外 2.5Y5/1 灰	口縁部 1/4 つまみほぼ完存	12号墳墳丘南
		底径					
		器高					

第3章 発見された遺構と遺物

9	須恵器 蓋	口径 17.6 底径 器高	内外面ロクロナデ。外面回転ヘラケズリのみ。つまみ挿入、ロクロナデ(制御)益子産。	白色細粒多量、 白色粗粒少量、 小礫微量。	良好。 内 5Y5/1 灰 外 7.5Y5/1 灰	口～天井部 1/2 内 完存 つまみ欠損	12号墳墳丘南 No.3,7,8,20,24,25、 南斜面、南裾遺物集 中区
10	須恵器 高台付坪	口径 (16.0) 高台径 器高	口縁部～体部内外面ロクロナデ。益子産。	白色細粒多量、 白色粗粒少量、 小礫微量。	良好。 内 5Y5/1 灰 外 N5/0 灰	口～体部 1/4	12号墳墳丘南 No.17,27、南裾遺物 集中区
11	須恵器 蓋	口径 (16.2) 底径 器高 3.3	内外面ロクロナデ。天井内面中央にナデ。外面回転ヘラケズリ。焼成前ヘラ記号あり。益子産。	白色細粒多量、 白色粗粒少量、 小礫微量。	良好。 内 7.5Y5/1 灰 外 10Y5/1 灰	口縁部 1/8 つまみ～体部 2/3	12号墳南斜面、南 裾遺物集中区
12	須恵器 高台付坪	口径 15.9 高台径 9.0 器高 5.1	内外面ロクロナデ。底部内面に押圧痕あり。底部外面全面回転ヘラケズリ。高台貼り付け、ロクロナデ。底部外面に焼成前ヘラ記号あり。益子産。	白色細粒多量、 白色粗粒少量、 小礫微量。	良好。 内 N5/0 灰 外 N4/0 灰	口～体部 1/4 底～高台部 3/4	12号墳墳丘南 裾遺物集中区
13	須恵器 高台付坪	口径 (14.0) 高台径 (8.2) 器高 4.8	内外面ロクロナデ。底部内面中央ナデ。外面全面回転ヘラケズリ。高台貼り付け、ロクロナデ。底部外面に焼成前ヘラ記号あり。三産産。	白色細粒多量、 黒色細粒・白 色粗粒少量、 小礫微量。	良好。 内 5Y6/1 灰 外 7.5W6/1 灰	口～体部 1/4 底部完存 高台部 1/4	12号墳南斜面、南 裾遺物集中区
14	須恵器 高台付坪	口径 14.8 高台径 8.0 器高 4.2	内外面ロクロナデ。内面中央に押圧痕あり。底部外面全面回転ヘラケズリ。高台貼り付け、ロクロナデ。爪状圧痕あり。三産産。	黒色細粒多量、 白色細粒少量、 小礫微量。	良好。 内 5Y5/1 灰 外 5Y6/1 灰	口～体部 1/2 底～高台部完存	12号墳墳丘南
15	須恵器 高台付坪	口径 14.6 高台径 8.2 器高 4.0	内外面ロクロナデ。底部内面中央に押圧痕あり。底部外面全面回転ヘラケズリ。高台貼り付け、ロクロナデ。底部内面摩耗しており、使用頻度高い。三産産。	黒色細粒・白 色細粒多量、 小礫微量。	良好。 内 5Y5/2 灰オリーブ 外 5Y5/1 灰	口～体部 3/4 底～高台部完存	12号墳墳丘南
16	須恵器 高台付坪	口径 (14.3) 高台径 (8.6) 器高 4.1	内外面ロクロナデ。底部外面全面回転ヘラケズリ。爪状圧痕あり。三産産。	黒色細粒・白 色微粒多量、 白色粗粒少量、 小礫微量。	良好。 内 7.5Y5/1 灰 外 5Y6/1 灰	口～体部 1/4 底部 3/4	12号墳墳丘南 No.2,15、南裾遺物 集中区
17	須恵器 高台付坪	口径 (15.0) 高台径 9.0 器高 4.4	内外面ロクロナデ。底部外面全面ヘラケズリ。高台貼り付け、ロクロナデ。三産産。	黒色微粒多量、 白色粗粒少量、 小礫微量。	良好。 内 5Y5/1 灰 外 2.5W6/1 黄灰	口～体部 1/4 底～高台部 1/2	12号墳墳丘南
18	須恵器 高台付坪	口径 (14.8) 高台径 (8.2) 器高 4.0	内外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラケズリ。高台貼り付け、ロクロナデ。三産産。	白色微粒多量、 白色細粒・黒 色細粒少量、 小礫微量。	良好。 内 2.5Y5/1 黄灰 外 10Y5/1 灰	口～体部一部 底～高台部 1/3	12号墳墳丘南
19	須恵器 高台付坪	口径 (14.4) 高台径 器高	口縁部～体部内外面ロクロナデ。体部外面に焼成前ヘラ記号あり。益子産。	白色細粒多量、 白色粗粒少量、 小礫微量。	良好。 内 5Y5/1 灰 外 7.5Y5/1 灰	口～体部 1/8	12号墳墳丘南 No.14
20	須恵器 平瓶	口径 底径 器高	内外面ロクロナデ。胴中Aは接合した部分が割離し、頸部と推定される。胴中Bは断面の一部にロクロナデが及び、閉塞した蓋とみられる。このことから平瓶の上面の破片と考えられ、外面に自然釉が付く。東海産。	白色細粒・黒 色細粒少量、 小礫微量。	良好。 内 2.5Y7/1 灰白 外 5Y7/2 灰白	破片	12号墳墳丘南 No.13
21	須恵器 壺	口径 底径 器高	胴部外面縦格子叩き。内面同心円当て具痕。三産産か。	白色細粒・黒 色細粒少量、 白色粗粒微量。	良好。 内 7.5W6/1 灰 外 5Y5/1 灰	破片	12号墳南側土
22	須恵器 壺	口径 底径 器高	胴部外面平行叩き。内面木製無文当て具痕。南比企産。	白色微粒多量、 黒色細粒少量、 白色針状物・ 白色粗粒微量。	良好。 内 7.5Y5/2 灰オリーブ 外 2.5W6/2 灰黄	破片	12号墳墳頂付近
23	須恵器 坏	口径 底径 (7.6) 器高	体部内外面・底部内面ロクロナデ。底部外面ヘラ切りシナデ。板状圧痕あり。益子産。	白色微粒多量、 白色細粒少量、 白色粗粒微量。	良好。 内 N5/0 灰 外 N5/0 灰	底部 1/3	12号墳墳丘南・南側 面
24	須恵器 壺	口径 底径 器高	胴部外面平行叩き。内面木製無文当て具痕。益子産。	白色微粒多量、 白色粗粒 微量。	良好。 内 5Y6/1 灰 外 7.5Y4/1 灰	破片	12号墳墳頂付近
31	須恵器 壺	口径 25.6 最大径 48.5 器高 [48.3]	胴部外面格子叩き。頸部はロクロナデのち縦横波状文を施す。内面同心円当て具痕。当て具痕の大きさが下位では径6.0cm、中・上位では径8.6cm、産地不明。	白色微粒多量、 黒色微粒少量。	良好。 内 N4/0 灰 外 N5/0 灰	口～胴部完存 底部欠損	12号墳周溝 No.1～ 8

番号	区分	種別	計測値				残存	特徴	出土位置
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)			
25	石製品	勾玉	4	2.2	1.1	13.8	完存	表面は概ね短軸方向に磨き。孔は片面から穿つ。瑪瑙製。	12号墳 墓道確認トレンチ
26	鉄製品	鉄鏃	3.40	0.60	0.30	2.78		片刃箭式鉄鏃	12号墳 南東部
27	鉄製品	鏃の覆被か	3.1	0.9	0.35	2.21			12号墳 南東部
28	鉄製品	鏃の覆被か	3.4	0.55	0.4	2.85			12号墳 南東部
29	鉄製品	鏃の覆被か	3.3	0.6	0.4	2.93			12号墳 南東部
30	鉄製品	鏃の覆被か	2.0	0.45	0.5	3.3		2本の鏃が重なったものであろう。	12号墳 墓部

須恵器蓋は内面にかえりのある一群とかえりがなくて扁平なつまみの付く一群に分類できる。いずれも墳丘南側から出土している。かえりのある蓋は、図中1～4である。全般に焼きが不良で、胎土に黒色微粒を含み、色調灰白色であることから三叢山麓窯跡群産と目される。かえりは口縁部から出るもの(1)や退化したかえり(4)まで形態差がある。外面は回転削りしている。かえりのない一群の蓋は、胎土によって三叢産と益子産に分別され、三叢産は6点、益子産は3点であった。扁平なボタン状つまみであり、つまみの剝離痕を観察すると、つまみの基部を蓋に挿入して製作したものと推測され、天井内面中央に押圧痕が確認できる。

須恵器高台付杯は、最もまとまって出土した。胎土の特徴によって三叢産と益子産に分別される点は、蓋と同じであるが、三叢産は6点、益子産は3点であり、蓋の産地別の数と一致する。この点で参考になるのが、掲載図15の底部内面は摩耗しており、使用頻度の高いものであった。墳墓という性格から、ここで高い使用頻度は想定しがたく、墳墓に供献する前に使用したものであると推察できる。蓋・高台付杯も組合せて集落で使用後に供献されたために、さまざまな産地の製品が混在したものと考えられる。

20は閉塞した部分と頸部剝離部分があることから、平瓶の破片とみられる。23の杯は底径からみて古墳の時期よりは2世紀以下である。須恵器甕は三叢産・益子産のほかにも埼玉県南比企産が含まれる。

勾玉(25)は瑪瑙製で、表面に研磨痕が観察され、穿孔は一方から行われている。鉄製品は鉄鏃片とみられる破片のみである。26は片刃箭式で刃部下端が撫間で、刃部の長い点が時期的な特徴を反映する。

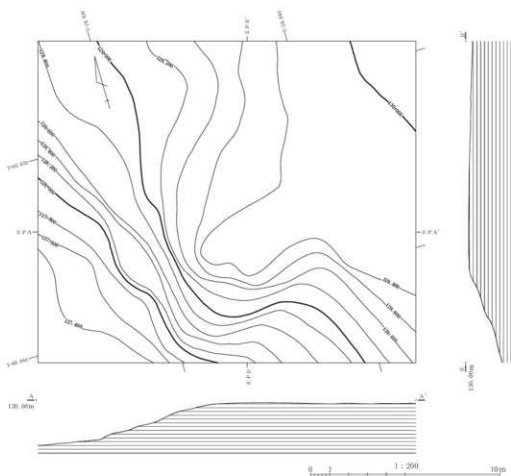
第3節 13号墳

(1) 位置と現状

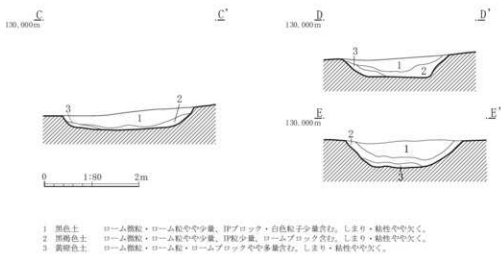
狭い鞍部の平坦面から南側斜面の境に立地する。これまで確認されていた本古墳群では11号墳を含めて最も南側の一群になる。これまでの所在調査でも確認されていなかったことから、比較的早い時期に墳丘が削平されていたものと推察される。調査前の確認調査によって周溝が発見されたことから古墳と判断した。発掘前の墳丘の観察・測量の結果では、南側緩斜面部分でわずかに墳丘が遺存しており、測量図から比高差をみると0.6～1.0 m程の高さで、主体部の北側の鞍部においては、墳丘は完全に削平されている。調査前は山林であった。

(2) 墳丘(第16・18図・図版四)

表土除去前の測量図では、古墳の部分で南側斜面に凸字状の高まりが確認できる。しかし、発見された周溝内側よりも凸字状の高まり部分が狭いことから、南側斜面でも墳丘裾は多くが削平されていると判断される。

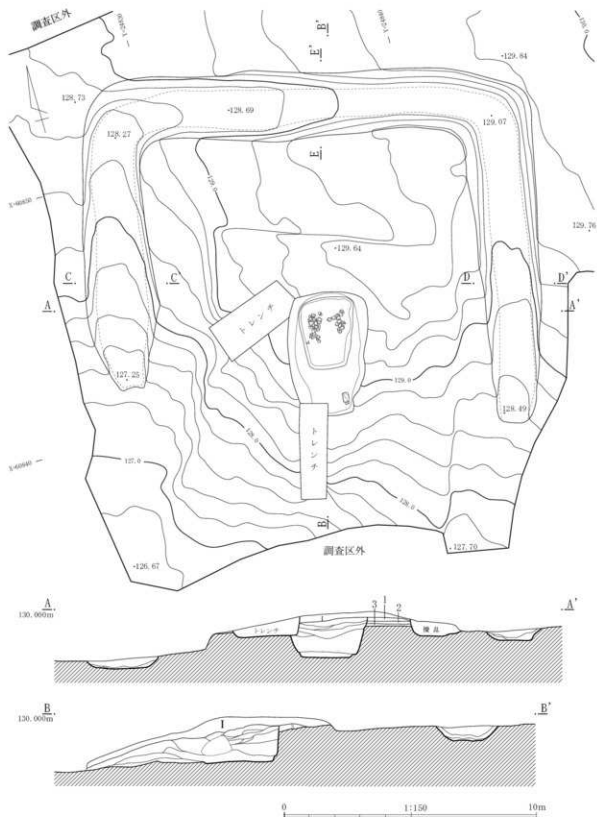


第16図 頼朝塚古墳群 13号墳 墳丘測量図（調査前）



第17図 頼朝塚古墳群 13号墳 周溝土層図

墳丘は地山であるローム層とその上に堆積する黒褐色土の表土上に築かれている。残っていた墳丘のうち、表土を除く盛土は30cm程を残すのみである。土層図B-B'の3層は墳丘盛土と判断され、ロームブロック多量、ローム微粒やローム粒・円礫・小礫を含む明黄褐色土である。



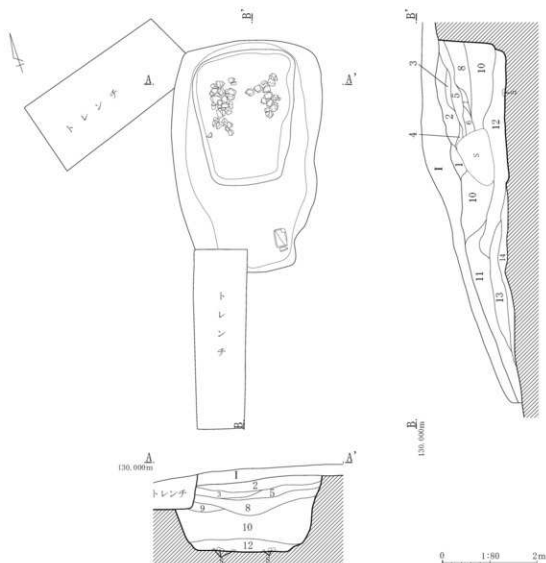
- | | | |
|---|--------|--|
| 1 | にぎい褐色土 | ローム微粒・ローム粒・IP粒やや少量、IP微粒・空微粒・SP粒少量、IPブロック含む、しまりややあり。粘性やや欠く。 |
| 2 | 新褐色土 | ローム粒・ロームブロック・IPブロックやや少量含む、しまりややあり。粘性やや欠く。 |
| 3 | 明黄褐色土 | ロームブロック少量、ローム微粒少量、ローム粒・小礫・5cm前後の円礫含む、しまりあり。粘性ややあり。 |

第18図 類朝塚古墳群 13号墳 墳丘測量図・土層図

(3) 周溝 (第17図)

周溝からみた古墳の形態は方墳である。その規模は西北西-東南東の周溝外縁で18.1 m、墳丘側周溝下端で14.0 mである。北北東-南南西で測る規模は北側周溝外縁から14.1 m以上である。南側にはトレンチ調査を行ったが、周溝は確認されなかったことから、南北規模は不明である。

周溝の上端の幅は、2.3~2.9 m程で、2.5 m前後の幅が主体となる。下端幅は1.3~1.9 m程で、1.5 m程が主体となっている。深さは最も遺存の良い北側周溝で確認面から約60~80 cmである。東西の周溝は



- 1 表土
 - 2 にぶい褐色土
 - 3 褐色土
 - 4 にぶい黄褐色土
 - 5 褐色土
 - 6 褐色土
 - 7 にぶい黄褐色土
 - 8 褐色土
 - 9 褐色土
 - 10 にぶい褐色土
 - 11 にぶい褐色土
 - 12 にぶい褐色土
 - 13 にぶい褐色土
 - 14 にぶい褐色土
- I 表土
 IP粒や少量、IPブロック、黒色土ブロック少量含む。しまり・粘性やや欠く。
 2 ローム粒・IP粒・SP粒・SPブロックやや少量、ロームブロック少量、IPブロック含む。しまり・粘性やや欠く。
 3 ローム粒・ロームブロック・IPブロックやや少量、IP粒少量、ローム微粒含む。しまり・粘性やや欠く。
 4 IP微粒・IP粒やや少量、ローム微粒・ローム粒、黒色土ブロック少量含む。しまり・粘性やや欠く。
 5 IPブロックやや少量、ローム粒・ロームブロック・IP粒・SP粒・SPブロックやや少量、黒色土ブロック含む。しまり・粘性やや欠く。
 6 IP微粒・IP粒・SP微粒やや少量、SP粒少量含む。
 7 SP微粒・SP粒やや少量、ローム微粒・ローム粒、IP微粒・IP粒・小礫少量含む。しまり・粘性やや欠く。
 8 IP微粒・IP粒やや少量、黒色土ブロック少量、ローム微粒・ローム粒含む。しまり・粘性やや欠く。
 9 ローム微粒・ローム粒含む。しまり・粘性やや欠く。
 10 凝灰岩片多量、IP粒・IPブロックやや少量、ローム微粒・ローム粒少量含む。しまりややあり、粘性やや欠く。
 11 凝灰岩片・小礫・IP粒・SP粒やや少量、ローム微粒・ローム粒・IPブロック・SPブロック少量含む。しまり・粘性やや欠く。
 12 IPブロック・小礫やや少量、ローム微粒・ローム粒・IP粒少量、凝灰岩片含む。しまりややあり、粘性やや欠く。
 13 小礫やや少量、ローム粒・ロームブロック・IP粒・SP粒少量、凝灰岩片含む。しまりややあり、粘性やや欠く。
 14 ローム微粒やや少量、凝灰岩片少量、ローム粒・小礫含む。しまりややあり、粘性やや欠く。

第19図 頼朝塚古墳群 13号墳 主体部平面図・土層図

南側に向かい確認面から遺存する深さは浅くなっていく。

埋土は、各セクションで3層に分別でき、最下層(3層)はローム粒・ロームブロックなどを多量含む土で、周溝壁の崩落土の可能性もある。その上層は黒色土・黒褐色土からなる。この層には墳丘土中にみられる黄褐色土や小礫が主体的には確認されないため、墳丘の崩落土が流入したとは考えられない。

(4) 主体部(第19図・図版四・五)

方形に巡る周溝の中心にロームを掘り込む主体部が確認された。本墳も主体部を構成する石材は既に抜き取られており、掘方を確認できたのみである。確認面での掘方の規模は南北約4.9m、東西約3.1mで、平面胴張りの長方形を呈しているが、東西側壁は南側に向かい幅を減じていく。底面での規模は南北4.7m、東西2.6mである。深さは現表土から底面まで1.8mを測り、本来はさらに深かったと考えられる。この掘方の北半部で平面台形の範囲が深くなっていた。その規模は、南北長2.8m、北辺の東西幅2.1m、南辺の東西幅1.4mで、南側底面からの深さは5～6cmであった。この範囲には、凝灰岩の割石が底面に敷かれた状態で確認された。割石は10～20cm程の大きさであったが、10～15cm程のものが主体になっている。西半部では河原石も数点含まれていた。これが床石と判断することができれば、その東西幅は約1.5mであることから石室内法幅が想定できる。なお、羨道を明らかにするために設定したトレンチ南側においても凝灰岩片がまとまって出土した。これらのことから、本墳の石室は凝灰岩切石積であったと判断される。

底面から20cm程浮いたレベルで、下面が平坦で上面が薄餅状の石が出土した。この石は出土時の東西長125cm、南北長110cmで、北側は割れている。その北側にも長軸114cm、短軸80cmの石があった。これらは、大きさなどから石室の天井石の可能性もある。前者には出土時の上面・側面に切削などの加工痕は確認されなかった。掘方の南東隅にも底面に近いレベルで長方形の石があったが、性格は明らかでない。

羨道を明らかにするために、主体部の南側に幅1m程のトレンチを設けた。しかし、羨道の平面プランを含めて、構造などは明らかにできなかった。

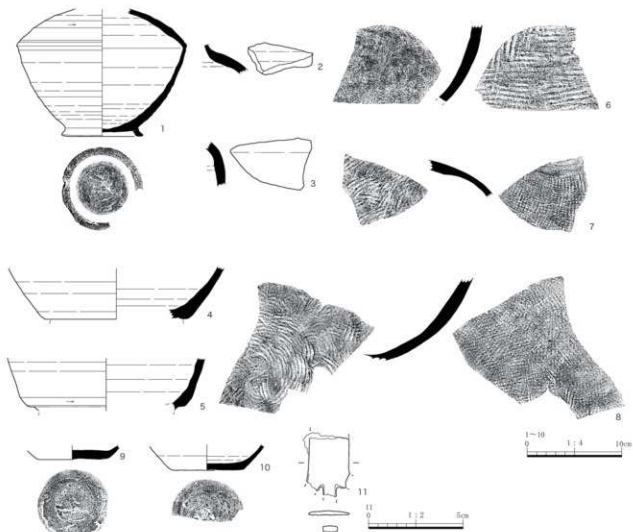
主体部はすでに盗掘され、天井石・奥壁・側壁の石も抜き取られている。盗掘の際に掘方全体を掘ったと推定され、裏込めの土層が確認できなかった。埋土は概ね褐色土にぶい褐色土が水平に堆積している。各層には今市バミス(1P)・七本桜バミス(SP)・ロームの粒やロームブロックを概して少量づつ含み、石室の破片と推定される凝灰岩片などを含んでいる。特に下層の10層において凝灰岩片を多量に含んでいたことから、石を抜き取り後に埋め戻した可能性もある。

(5) 遺物の出土状況

墳丘南側の羨道を確認するために設けたトレンチなど、墳丘南側・南西側から遺物が多く出土した。図化した遺物では1・7・8・10が墳丘南側、墳丘南西側からは11の鉄鏝が出土した。これらには、肩部に稜のある須恵器壺や腸状のある鉄鏝など本来この古墳築造時期に近い遺物のほかに、9世紀前半頃の須恵器環などが複数点ある。これらの遺物が、本来墳丘上や裾にあったのか、石室内にあったのか判別できない。

(6) 出土遺物(第20図・第4表・図版九)

土器では、須恵器のみを図化できた。この内益子産と判断できたのは2・4・9・10で、三倉産の可能性のあるのは8の甕で、他は産地不明である。1の長頸壺は肩部に稜と沈線があり、高台の張り方からみて7世紀代のものであろう。胎土の断面は表裏面側が灰色で、間層は紫褐色である。2～5は壺の破片とみら



第20図 頼朝塚古墳群 13号墳 出土遺物実測図

第4表 頼朝塚古墳群 13号墳 出土遺物観察表

番号	種類 器種	計測値 (cm)	特徴	胎土	焼成・色調	残存	注記
1	須恵器 壺	口径	内面ロクロナデ、外面下位回転ヘタケズリ。体部中位ロクロナデ、胴部回転ヘタケズリ。沈線痕。底部外面全面ロクロナデ。高台貼り付く。	白色微粒・細粒多量、白色粗粒少量、小礫微量。	良好。	胴部 1/4 周 体部 1/3 周 底～高台部 1/4 周	13号墳南側墳丘 No.2,5,6,7,8、一括
		高台径					
2	須恵器 短頸壺か	口径	内外面ロクロナデ。益子産。	白色微粒・白色細粒多量、小礫微量。	良好。	破片	13号墳
		高台径					
3	須恵器 壺	口径	内外面ロクロナデ。産地不明。	白色細粒多量、白色粗粒少量。	良好。	破片	13号墳周辺
		高台径					
4	須恵器 壺	口径	内外面ロクロナデ、高台貼り付(沈線)・益子産か。	白色細粒多量、白色粗粒少量、小礫微量。	良好。	破片	13号墳
		高台径					
5	須恵器 壺	口径	内外面ロクロナデ、外面体部下端回転ヘタケズリ。産地不明。	白色微粒・細粒多量、白色粗粒微量。	良好。	体下部 1/6 周	13号墳覆土一括
		高台径					
6	須恵器 壺	口径	胴部外面平行明き、内面ナデ。産地不明。	白色細粒多量、白色粗粒少量、小礫微量。	良好。	破片	13号墳
		底径					
		器高					

7	須恵器・甕	口径		胴部外面縦格子叩き。上端クロナデ、内面同心円当て具痕。中型甕の胴部片。産地不明。	白色細粒多量、黒色細粒少量。	良好、 内 5/7/1 灰白 外 7.5/6/1 灰	破片	13号墳南側墳丘 No.9
		底径						
		器高						
8	須恵器・甕	口径		胴・底部外面縦格子叩き。内面同心円当て具痕。丸底の甕であろう。三義産の。	白色微粒多量、 白色・黒色細粒少量。	良好、 内 5/7/1 灰白 外 7.5/5/1 灰	破片	13号墳南側墳丘一括
		底径						
		器高						
9	須恵器・坏	口径	7.2	内外面クロナデ。底部外面へツ切り のち軽いなデ。益子産。	白色細粒多量、 白色粗粒少量、 小礫混量。	良好、 内 7.5/4/1 灰 外 7.5/5/1 灰	底部完存	13号墳
		底径						
		器高						
10	須恵器・坏	口径	(7.4)	内外面クロナデ。底部外面へツ切り のちナデ。益子産。	白色微粒多量、 白色細粒・粗粒少量。	良好、 内 10/5/1 灰 外 7.5/5/1 灰	底部 1/2	13号墳南側墳丘 No.4
		底径						
		器高						

番号	区分	種別	計測値				現存	特徴	出土位置
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)			
11	鉄製品	鉄鏃	3.1	2.25	0.35	7.89	先端欠損	鍍身片丸造 櫛形あり 広根式	13号墳南西側墳丘一括

れる。6は胴部外面に木目の粗い平行叩きを角度を変えて格子叩き状にしている。7・8は胴部外面に縦格子叩き、内面に同心円当て具痕がある。8の甕は胎土に黒色細粒があり、色調は灰白色になっており、三義産の特徴を示す。丸底であることから古墳築造時に近い時期のものであろう。鉄鏃(11)は腸袂があり、両側縁が平行気味であることから柳葉状の鏃であろう。鏃身の断面は片丸造りである。

第4節 その他の遺構と遺物

今回の調査は、道路建設予定地内の古墳を発掘したが、その周辺から古墳時代以外の遺構・遺物も発見された。ここでは、これらをまとめて報告する。なお、当該期の遺構・遺物は、建設予定地内で発掘調査を実施しなかった地点に散在・群在する可能性が高く、未調査地にも広がるのが想定される。

1. 遺構(第21図・図版5)

縄文時代の陥し穴が2基発見された。いずれも12号墳の周囲で、丘陵鞍部から南西に面した緩斜面に立地する。

S K-03

後述のS K-04よりも斜面の下位に位置する。町道の掘削面の表土を除去して、本遺構が確認された。平面楕円形で、長軸145cm、短軸114cmで、確認面からの深さは130cmである。遺構の西半部は町道によって大半が壊されているが底面は遺存していた。底面は、長軸60cm、短軸45cmの平面楕円形である。

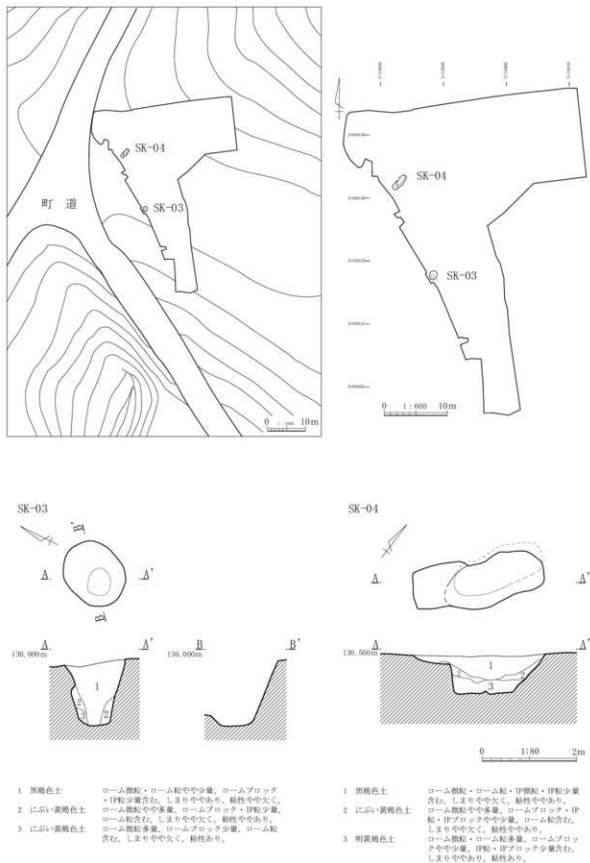
土層をみると、周壁の下半では壁が崩落して、にぶい黄褐色土が三角堆積していた。その上にはややしまりのある黒褐色土が自然堆積したものと推察される。遺物は出なかった。

S K-04

丘陵鞍部の南側縁に立地する。溝状の陥し穴で、その主軸は丘陵の傾斜面に直交している。確認面での規模は、長軸258cm、短軸105cmであるが、南西部は確認面から約15cm下がって底面になる。その北東側はさらに60cm程下がる。深く掘り下げている部分の壁は東・北側で抉れている。底面は今市バミスを超え、ローム層を掘り込み、平面長楕円形で、概ね平坦である。

土層は、壁際にローム粒を多く含むにぶい黄褐色土がレンズ状に堆積し、この上に黒褐色土が自然堆積している。形態などから陥し穴状土坑とすべきであろう。遺物は出なかった。

第3章 発見された遺構と遺物



第21図 頼朝塚古墳群 縄文時代土坑位置図・平面図・土層図

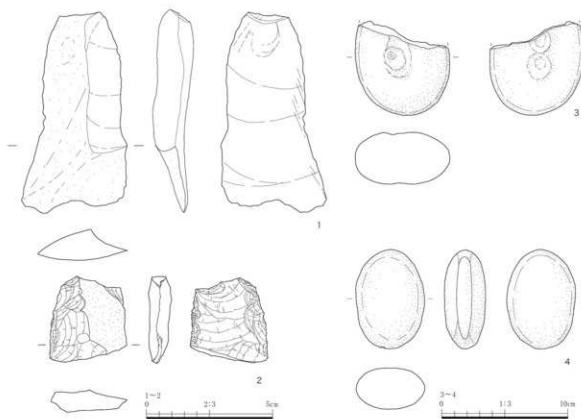
2. 遺物 (第22・23図・第5・6表・図版一〇)

古墳調査中などに調査区内から出たものを全て掲載する。本遺跡は丘陵鞍部と斜面の境にあたるが、限定された調査地であったために、本来は当該時代の遺物が建設予定地内にも広がっていた可能性が高い。

(1) 石器

1は自然面を縦長に剥離していることから、石核の調整剥片とみられる。平行する両側縁に使用痕がみられる。石材は珪質泥岩で、色調は2.5Y6/4にぶい黄色、長さ7.6cm、幅4.3cm、厚さ1.2cm、重量29.85gである。旧石器時代の所産と考えられる。

2は短冊状の縦長剥片で、平行する両側縁の裏側を中心に微細な加工を行う。中位以下を欠損する。石材はチャートで、色調は2.5YR3/3暗赤褐色である。長さ3.2cm、幅3.1cm、厚さ0.8cm、重量10.45gである。縄文時代の所産であろう。



第22図 頼朝塚古墳群 石器実測図

第5表 頼朝塚古墳群 石器観察表

番号	出土位置	区分	種別	石材	特徴	計測値 (cm・g)			
						最大長	最大幅	最大厚	重量
1	北区	石器	剥片	珪質泥岩	平行する両側縁に使用痕がみられる。	7.6	4.3	1.2	29.85
2	表塚	石器	剥片	チャート	平行する両側縁の裏側を中心に微細な加工を行う。	3.2	3.1	0.8	10.45
3	13号墳トレンチ南側No.2	石器	磨石	安山岩	図中左側の面は中央が1箇所、右側の面は2箇所窪んでいる。	8.2	8.3	4.5	390.81
4	南区	石器	磨石か	安山岩	表面は平滑である。	7.7	5.5	3.2	191.83

3は安山岩の磨石で、図中左側の面は中央1箇所が窪み、右側の面は2箇所が窪みが観察される。長軸一方端が欠けている。色調は2.5Y6/2灰黄色で、遺存する長さ8.2cm、幅8.3cm、厚さ4.5cm、重量390.81gである。13号墳南側トレンチにおいて出土した。

4は安山岩で、平面小判形をした石で、磨石の可能性が高い。表面は平滑で、色調は7.5YR6/6橙色で、長さ7.7cm、幅5.5cm、厚さ3.2cm、重量191.83gである。

(2) 縄文土器

1は早期夏島式の胴部片である。色調は外面7.5YR5/4にぶい褐色、内面7.5YR5/2灰褐色である。胎土には白色細粒多量、黒色細粒を少量含む、燃糸文が施される。焼成は良好である。2は早期の尖底土器の底部片である。外面無文で、色調は7.5YR6/4にぶい橙色、内面は7.5YR3/1黒褐色で、焦げが付着している。胎土は白色微粒多量、黒色細粒を少量含む、焼成は良い。3はキャリパー形の口縁部片で、中期初頭の所産と考えられる。色調は外面7.5YR7/3にぶい橙色、内面は7.5YR4/3褐色で、胎土には黒色の扁平粒を多く含む。口縁部外面は無文で、内面は肥厚する。13号墳主体部から出土した。4は頸部片で、中期の所産とみられる。色調は外面7.5YR6/4にぶい橙色、内面は10YR6/3にぶい黄褐色を呈し、胎土には白色細粒少量、褐色細粒・白色粗粒を微量含む。外面にはLRを縦に施文し、焼成は良い。5は胴部片で、RLを縦に施文する。色調は外面5YR6/4にぶい橙色、内面は7.5YR6/3にぶい褐色で、胎土には白色微粒多量、白色粗粒少量含む。焼成は良く、12号墳の墳丘から出土した。



第23図 頼朝塚古墳群 縄文土器実測図

第6表 頼朝塚古墳群 縄文土器観察表

番号	出土位置	時期	器種	部位	器厚 (cm)	色調	焼成	胎土	文様などの特徴
1	南区	早期	夏島式	深鉢 胴部	0.8	にぶい褐色	良	白色細粒多量、黒色細粒少量含む。	燃糸文が施される。
2	北区	早期	深鉢	底部	1.1	にぶい橙色	良	白色微粒多量、黒色細粒少量含む。	外面無文、内面に焦げあり。早期の尖底土器。
3	13号墳主体部	中期初頭か	深鉢	口縁部	0.7	にぶい橙色	良	黒色の扁平な粒を多量含む。	口縁部外面無文、断面キャリパー形となり肥厚する。
4	北区	中期	深鉢	頸部	0.8	にぶい橙色	良	白色細粒少量、褐色細粒・白色粗粒微量含む。	LRを縦に施文。
5	12号墳墳丘		深鉢	胴部	0.8	にぶい褐色	良	白色微粒多量、白色細粒少量含む。	RLを縦に施文。

第4章 総括

第1節 出土土器の時期

2基の古墳から出土した遺物は、須恵器や鉄製品の残片が大半であり、古墳の時期を考えるには資料が少ない。まず、残された須恵器の時期を検討していきたい。

1. 12号墳

12号墳からは、墳丘南側や裾からまとまって須恵器高台付坏や蓋が出土し、周溝の北側から須恵器甕も溝の底面から出た。これらの遺物の時期について検討してみる。

(1) 須恵器甕

周溝から出土した甕は胴部が真格子叩きになっている。この工具については、内山敏行氏によって、6世紀末から7世紀初頭に出現することが指摘されている(内山1997)。これに従えば、12号墳の上限は6世紀末から7世紀初頭となる。ただし、この叩き甕の出た御鷲山古墳について、大橋泰夫氏はTK-43の時期とするが(大橋1997)、秋元陽光氏はさらに少し古く位置付けている(秋元2005)。

(2) 須恵器蓋・高台付坏

墳丘南側や裾でまとまって出た須恵器高台付坏や蓋は時期的に大きく2時期に分別される。A類は第14図1～4で、B類は5～9・11である。A類は内面にかえりを有し、破片であるが、口径は12.0～13.2cmの間に収斂する。但し、かえりの出方によってかえりの高い1～3、低い4に分類できる。これらは、胎土の特徴から、栃木県西部の三叢山麓窯跡群産と判断された。この窯では概ね編年が作成されており、近年では宓光沢窯の報告のなかで、7世紀前葉から9世紀後半までの階梯を示している(津野2011)。三叢編年でかえりのある蓋は、古江浄琳寺裏山窯で、口径10.6cmのものが出ている。この蓋は7世紀第3四半期後半から末に位置付けられている。この次の段階は、北山・八幡窯である。北山・八幡窯では、14～17cmに及ぶかえりのある蓋が出土しており、7世紀末から8世紀初頭に位置付けられている。かえりは、伏せた時に口縁部よりも下に出るものを含むが、出ないものが大半である。つまみは極めて低いボタン状かリング状を呈したものとなっている。

これらと、頼朝塚古墳群12号墳の須恵器蓋を比較すると、12号墳では約12～13cmの間に収まり、口径が時期的に下降すると、大きくなるという傾向からすれば、明らかに北山・八幡窯の時期よりもA類のかえり蓋は古くなる。古江浄琳寺裏山窯と比較すると、12号墳の方が口径が大きくなっている。しかし、12号墳の1・2のかえりは、古江浄琳寺裏山窯よりも大きく、古相をも示す。現状では、三叢窯の一括資料に基づいた形態の多様さは明らかでないが、古江浄琳寺裏山窯に併行するか、北山・八幡窯よりも古くなるものと位置付けておきたい。実年代で示せば、7世紀第3四半期後半から第4四半期前半頃になるであろう。

かえりの無いB類の蓋は、三叢産と益子産がある。全体の形がわかるものでは、第14図6・11が益子産、7・8が三叢産である。いずれもつまみは低いボタン状から中央がわずかに突出する形態で共通している。三叢窯では、北山・八幡窯の蓋はつまみの中央部が突出しないリング状が主体であって(大川1976、津野1997、内山1997)、明らかに三叢産の蓋B類は北山・八幡窯よりも新しい。三叢窯の次の段階にあたる和田窯では、

つまみ中央部が出ないリング状と中央部が突出する扁平山形状つまみが拮抗している（間宮2002、三鑫窯跡研究会2009・2011）。その後の下津原窯の時期にはつまみの径が小さくなり、明らかに蓋B類の方が古い。これらの点から、三鑫窯産の第14図7・8は、和田窯の時期に比定できる。和田窯は8世紀第1四半期後半から第2四半期前半に位置付けられる（津野2011）。益子窯の蓋は、原東4号窯でも扁平山形状つまみが確認でき、この形態は原東3号窯でも存在する。従来の編年で、原東4号窯は8世紀初頭、原東1・3号窯は8世紀第2四半期に位置付けている（津野1997）。このため、第14図6・11の蓋は8世紀前半の所産と考えられる。

次に、高台付坏で全体の形がわかるものでは、第14図12が益子窯産、13～18が三鑫窯産である。高台が低くて、底部のやや内側に付く点共通しており、益子窯では原東1・4号窯に類例があり、三鑫窯では北山・八幡窯と和田窯の製品に類似している。これらの点から、高台付坏の時期は、7世紀末から8世紀前半の中に位置付けることができる。そして蓋・高台付坏の時期比定を総合すると、最も時期を絞れば、和田窯の時期で8世紀第1四半期後半から第2四半期前半になり、最も幅広くみれば、高台付坏の様相により7世紀末から8世紀前半の中に位置付けられる。いずれにしても蓋と高台付坏は組んで使用されることから、概ね8世紀前半の所産と考えておきたい。

須恵器の蓋・高台付坏の時期が上述のようになると、明らかに古墳の築造された時期よりも新しくなる。このため、これらの土器群は墓前祭祀などで供献されたものと推定することができる。

2. 13号墳

13号墳からは、第20図1の壺を除くと、時期比定可能な土器は出ていない。この壺は有稜の長頸壺で、肩部と体部の境に沈線を施し、高台が外側に踏ん張る特徴がある。しかし、胎土などから産地を特定することはできなかった。産地の編年からこの壺の時期を追えないため、類品を周辺の窯資料から調べてみたい。

(1) 関東地方などの窯出土資料（第24～26図）

栃木県

三鑫窯では北山3号窯、1・2・6・7号窯の捨て場から有稜壺が出ている。北山の須恵器窯跡群は概ね7世紀末から8世紀初めに位置付けられる（津野1997）。3号窯の壺は、口縁部に平坦面を持つ新しい形態で、肩に稜があるが、沈線はない。高台外面に稜線があるのは、群馬県の藤岡金井など西毛との関連があるとみられる。1・2・6・7号窯の捨て場から出た壺は肩に有稜で、底部からの開きが少ない特徴がある。

さらに、三鑫の和田窯では、沈線のない有稜長頸壺が出土しており、口縁部はラップ状に開くものと、平坦面のあるものが確認できる。前述のように、時期は8世紀第1四半期後半から第2四半期前半に位置付けられている。

県東部の益子窯では、原東3号窯で有稜の壺が出土しているが、肩に沈線はみられない。時期は8世紀第2四半期になる。これらから、県内の窯資料で見ると、有稜の壺は8世紀第2四半期を下限とすることがわかる。

群馬県

藤岡市の下日野金井窯跡群で有稜の壺が出土している。SY-1号窯・7号窯・17号窯、及びd3地点出土で、これはSY-14号窯の灰原に当たる。7号窯ではかえりのある蓋は出ていないが、1号窯とd3地点では径20cm程の大型のかえり蓋が確認される。17号窯でも径11cm程のかえり蓋があり、14号窯にお

いて蓋に法量分化がみられることから、1号・17号・d3地点(14号)窯は7世紀末頃になる。ここから出た有稜壺は肩部に沈線が施され、高台が外側に踏ん張り、縁に平坦面や突出部が付くなどの特徴がある。7号窯は8世紀前半になるが、肩・高台の形態も7世紀末のものと同様で変化がない。

茨城県

木葉下跡群の最も古い窯として山田窯があり、7世紀第3四半期に位置付けられている。壺は2号窯から出ており、肩部が丸味を持つ形態である。

埼玉県

末野窯では、末野遺跡の灰原出土品に有稜壺が確認できる。当該製品は灰原一面から出ており、この層位は7世紀第4四半期に位置付けられている。体部や肩部には波状文や櫛歯列点文を施し、沈線も入る。頸部には沈線を引き、平坦な口縁部も確認できる。高台は踏ん張る形で、下日野金井窯と南比企窯の中間的な形態である。

南比企窯の小谷B9号・10号・11B号窯で確認できた。期的には、かえりが口縁部よりも下に出る点やリング状つまみが確認され、鳩山編年のI期に位置付けられている。肩部に沈線は施さないが、小谷B10号窯では撫で肩の壺と共存している。高台が低くて断面三角形や台形になっている点で西毛の窯(下日野金井窯)とは明らかに異なっている。

東京都

多摩ニュータウン№342遺跡(小山窯)は精良な須恵器が多く、670～680年代に位置付けられている。高台は大きく踏ん張り、体部は算盤玉形に大きく開く点の特徴である。肩に沈線があり、口縁部には平坦面を設ける。これより下るのが多摩ニュータウン№513遺跡1号窯で、710～720年代になる。底径・高台径が大きくなり、箱形の形態に変化する。高台は外に踏ん張るが、端部が丸くなり、変化が明瞭である。

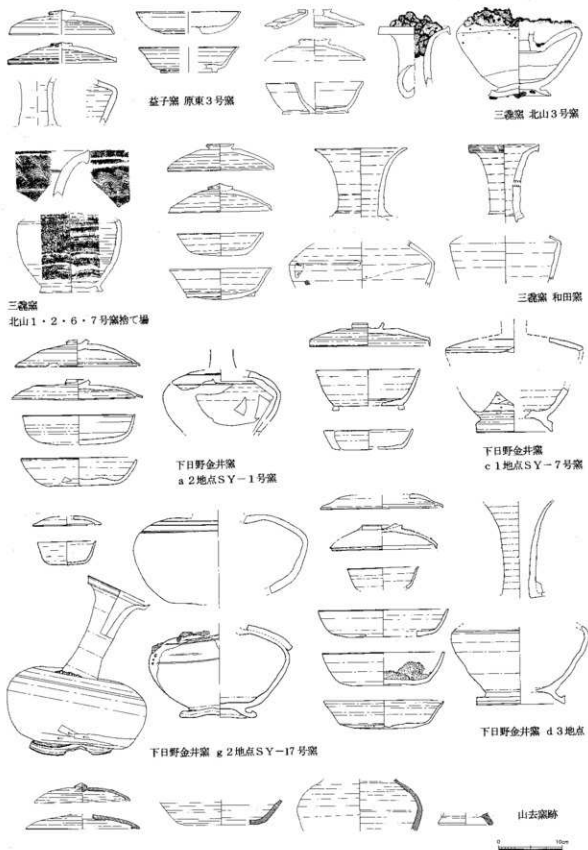
福島県

善光寺遺跡7号窯で有稜壺が確認できた。7号窯は床が6面あり、当該壺は第4床から出ている。7号窯の時期は3型式(650～670年代)と4型式(670～690年代)にわたるが、この壺は7号窯下層として3型式に位置付けられている。7号窯の壺は高台が大きく踏ん張り、体部が大きく開く。肩部に波状文と沈線を施すが、やや丸味を持っている。

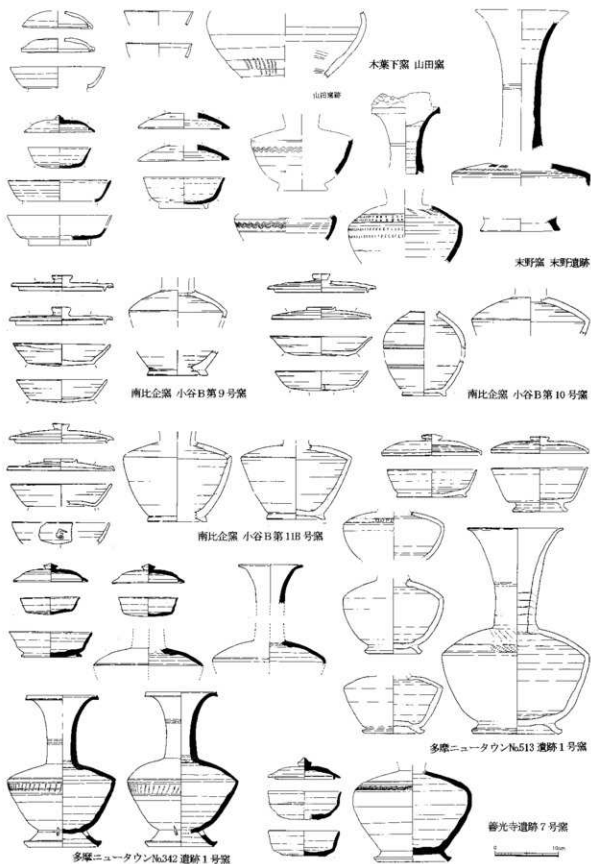
その他の地域

東海地方では、静岡県湖西窯は後藤健一氏によって、長頸瓶の編年が組まれている(後藤1989)。氏は長頸瓶について、口縁部形態によって大きく分類し、細部形態をも加味している。第Ⅲ期第3小期前(671～681年頃)には長頸瓶が出現し、肩の張らない球胴形である。フラスコ瓶の口縁部に類しており、第Ⅲ期第3小期後(681～701年頃)には口縁部に段がなくてラップ状で、有稜肩の長頸瓶も出現する。第Ⅳ期(第Ⅳ期第1・2小期、8世紀第1四半期前半～第1四半期後半)に肩の張りが増す。肩部の沈線は変遷図の第Ⅲ期第3小期後から第Ⅳ期第1・2小期にみられる。

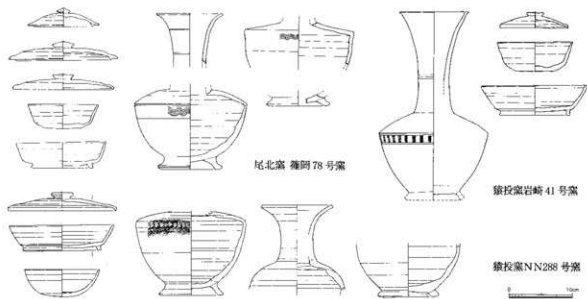
東日本を代表する窯として愛知県猿投窯・尾北窯でも長頸瓶が近似した時期に生産されている。かえり蓋の方が多く報告されている篠岡78号窯では小さな底部から体部が大きく開き、肩部に沈線を施す長頸瓶がある。この瓶の高台は長くて踏ん張っている。この肩の稜は次段階の岩崎41号窯(飛鳥V・平城I併行)にもあり、鳴海地区のNN288号窯でも平城Ⅱ段階で、有稜と撫で肩の長頸瓶があり、口縁部にも狭い平坦面がある。篠岡78号窯の長頸瓶よりも体部の開きが少なくなっている。



第24図 窯跡出土の有様壺(1)



第25図 窯跡出土の有様壺(2)



第26図 窯跡出土の有棧壺(3)

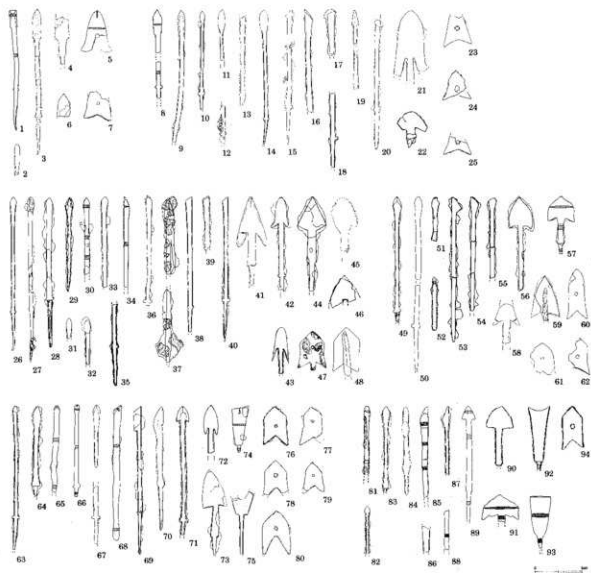
(2) 有棧壺の変遷と頼朝塚古墳群13号墳出土土壺の時期

頼朝塚古墳群13号墳で出土した肩に稜のある長頸瓶は各地の窯資料をみてもみると、7世紀後半に出現していることがわかる。尾北窯ではかえり蓋を伴う篠岡78号窯で出ており、飛鳥Ⅲ・Ⅳに併行する時期とされており(城ヶ谷2008)、藤原宮期を除く7世紀後葉であろう。この長頸瓶は高台が長く踏ん張り、径が小さく、体部が大きく開く点が特徴であろう。ほぼ併行し、670～680年代に位置付けられている多摩ニュータウン№342遺跡の壺も算盤玉形になっている。7世紀第4四半期及び末期には各地の窯で資料が増える。西毛の下日野金井窯及び群馬から影響を受けた栃木の三鑫窯では、高台が外開きの形態を残すが、埼玉県末野窯や群馬県山去窯では高台の開きが減り、端部の平坦面がなくなる。7世紀末から8世紀初頭の北山窯捨て場の壺は体部の開きが少なくなっており、3号窯の壺が群馬系であるのとは対照的である。8世紀前半の南比企の小谷Bの諸窯では高台がさらに低く退化し、多摩ニュータウン№513遺跡1号窯では体部の開きが直立に近くなり、箱形に変化している。有棧壺の下限は、8世紀第1四半期後半から第2四半期前半の三鑫の和田窯や710～720年代という多摩ニュータウン№513遺跡1号窯で、概ね共通する。

このように有棧壺の変遷をみても、頼朝塚古墳群13号墳の有棧壺は、算盤玉の形態をしていることから、篠岡78号窯や多摩ニュータウン№342遺跡1号窯が最も類似している。相違点では多摩ニュータウン№342遺跡で高台端部に平坦面があるが、頼朝塚古墳では端部に平坦面がない。しかし、篠岡78号窯に類似していることから、これらに併行すると判断でき、7世紀第3四半期後半から第4四半期前半頃に位置付けられる。

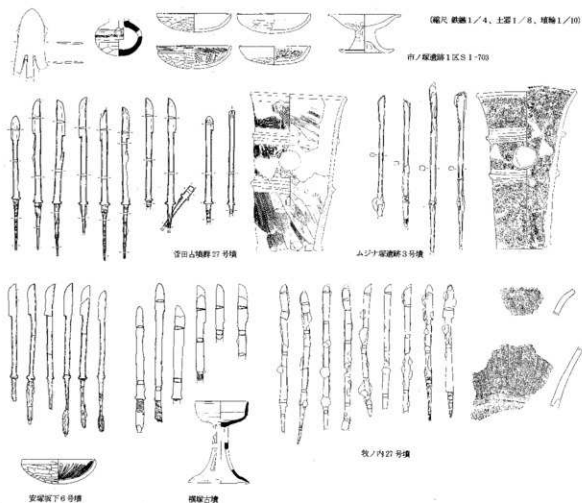
第2節 鉄鍔の時期

12・13号墳からは、極めて少ないながら、鉄鍔が出土している。両古墳の時期を判断する遺物であり、県内から出た後期古墳及び、併行する時期の集落遺跡出土の鉄鍔の変遷から、古墳の時期比定を行っている。



- 1 野木遺跡 SI-06 2 神高前遺跡 SI-02 3・4 殿山遺跡 I KT-34 5 刈山岳遺跡 2次 6号住居跡 6 砂田遺跡 5区 SI-19 7 砂田遺跡 5区 SI-28 8 南津遺跡 XX-31住居址 9 青龍河遺跡 1区 SI-25 10 西利郎河原遺跡 13区 SI-30 11 金山遺跡田 V区 SI-008 12・13 第5号住居跡 14 西利郎河原遺跡 3区 SI-11 15 瀧河遺跡 I SI-20 16 青龍河遺跡 2区 SI-80 17 青龍河遺跡 2区 SI-8 18 青龍河遺跡 2区 SI-90 19 西利郎河原遺跡 社区 SI-013 20 瀧河遺跡 SI-20 21 市ノ塚遺跡 1区 SI-703 22 辻の内遺跡 第24号住居跡 23 西利郎河原遺跡 13区 SI-2 24 砂田遺跡 3区 SI-1 25 鳩上遺跡 第98号住居跡 26 西利郎河原遺跡 3区 SI-22 27 西利郎河原遺跡 13区 SI-92 28 青龍河遺跡 2区 SI-188 29 仁王地遺跡 K7・6号住居 30 蟹が入遺跡 114号 31・32 西利郎河原遺跡 13区 SI-92 33 西下谷田遺跡 SI-607 34 南津遺跡 3L-54住居址 35 赤七新田遺跡 2区 SI-16 36 西下谷田遺跡 SI-518 37 砂田遺跡 1区 SI-6 38 西利郎河原遺跡 3区 SI-58 39 西下谷田遺跡 SI-506 40 金山遺跡 I SI-088 41 西利郎河原遺跡 3区 SI-22 42 津六宮遺跡 II SI-63 43 多功南原遺跡 SI-019 44 仁王地遺跡 G7・1号住居 45 吉林製工場内遺跡 第15号住居跡 46 赤七新田遺跡 2区 SI-16 47 ぼろノミヤ遺跡 SI-17 48 上横田A遺跡 SI-03 49 青龍河遺跡 2区 SI-180 50 上横田A遺跡 SI-07 51・52 辻の内遺跡 第232号住居跡 53 東林遺跡 SI-23 54・55 東林遺跡 SI-24 56 仁王地遺跡 E5・8号住居 57 前田遺跡 SI-076 58 金山遺跡IV Ⅴ区 SI-001A 59 仁王地遺跡 J7・10号住居 60 上横田A遺跡 SI-34 71 森後遺跡 II SI-0005 72 馬門遺跡 II SI-336 63 西利郎河原遺跡 3区 SI-1 64 青龍河遺跡 2区 SI-186 65 前田遺跡 SI-097 66 前田遺跡 SI-112 67 金山遺跡田 V区 SI-036A 68 前田遺跡 SI-087 69 西利郎河原遺跡 13区 SI-97 70 免の内台遺跡 SI-34 71 森後遺跡 II SI-0005 72 馬門遺跡 II SI-336 73 西利郎河原遺跡 3区 SI-38 74 前田遺跡 SI-133 75 西利郎河原遺跡 13区 SI-97 76 多功南原遺跡 SI-09 77 免の内台遺跡 SI-188 78 西谷塚遺跡 SI-376 79 瀧河遺跡 SI-22 80 免の内台遺跡 SI-34 81 松之坊遺跡 HT1 82 多功南原遺跡 SI-352 83 多功南原遺跡 SI-776 84 砂田遺跡 10区 SI-10 85 大宮遺跡 9号住居跡 86 青龍河遺跡 2区 SI-167 87 多功南原遺跡 SI-079 88 大宮遺跡 9号住居跡 89 森後遺跡B地点 1住居址 90 多功南原遺跡 SI-360 91 大宮遺跡 7号住居跡 92 多功南原遺跡 SI-818 93 大宮遺跡 9号住居跡 94 多功南原遺跡 SI-677

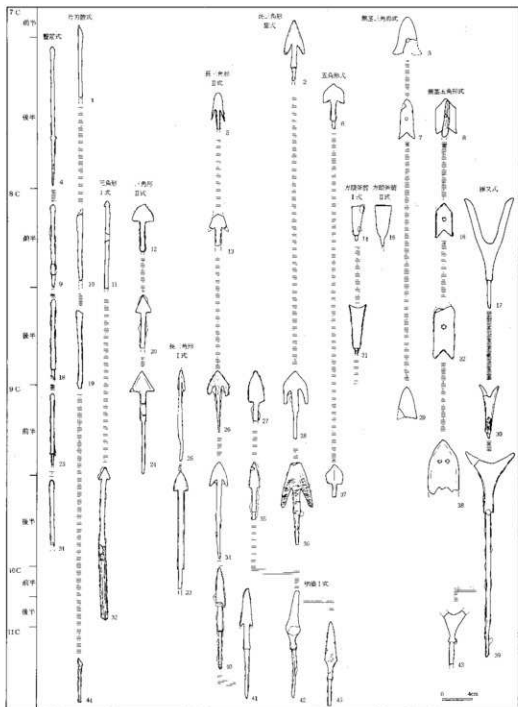
第27図 栃木県の集落出土鉄器—6世紀後半から8世紀中葉—



第28図 頼朝塚古墳群 12号墳出土鉄鍔の類例と伴出品

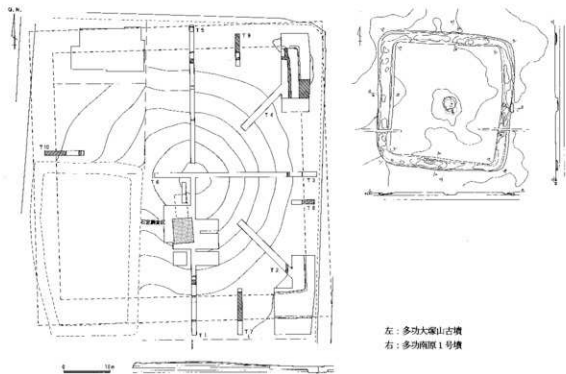
1. 12号墳（第27～29図）

12号墳から出た鉄鍔は片刃箭式で、刃部下端は撫で区である。この区の特徴は時期的な変遷をするので、類例を探してみる。栃木県域では片刃箭式は古墳時代後期に多く確認できるが、追葬という資料批判の必要がない集落出土品では、6世紀後葉以降に片刃箭式はほとんど確認できなかった。大半は端刃箭式と呼ばれる刃部が斜めになったもので、片刃箭式と関連する鉄鍔である。7世紀中葉になる薄石遺跡3L-54住居址で撫で区の片刃箭式が確認できる程度である。古墳出土品では少数確認できるが、ムジナ塚遺跡3号墳の片刃箭式が刃部長・刃部下の区の特徴が12号墳の鉄鍔と最も類似している。この古墳では埴輪を樹立しており、本県域における埴輪の終焉が6世紀末頃である点から時期が推測できる。また、菅田古墳群27号墳でも埴輪を有しており、片刃箭式がまとめて出土している。ここの鉄鍔は区に明瞭な段があり、12号墳よりも型的には古手である。菅田古墳群の報告では、27号墳を6世紀後葉としている（進藤ほか2012）。さらに、周溝内の埋葬施設であるが、安塚下6号墳でも出土した土師器杯の時期と、片刃箭式の特徴が、他の古墳と同じである。同様の事例は、埴輪を有する牧ノ内27号墳で、撫で区の片刃箭式がまとめて確認できる。長脚二段透かしの高杯が共伴した横塚古墳では、古墳の時期について、前述のようにTK-43かさらに少し遡るとする見解があることから、6世紀後葉としておきたい。これらの点から頼朝塚12号墳の片刃箭式は6世紀後葉の所産であり、古墳の築造時期と考えておきたい。



- | | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1: 溝市遺跡 3L-54 住居跡 | 2: 金山遺跡 1区 SI-008 | 3: 内山棚遺跡 6号住居跡 | 4: 免の内台遺跡第 42号住居跡 |
| 5: 多功南原遺跡 SI-019 | 6: 前田遺跡 SI-076 | 7: 上株田A遺跡 SI-07P-2 | 8: 上株田A遺跡 SI-03A |
| 9: 免の内台遺跡第 12号住居跡 | 10: 大坂遺跡 9号住居跡 | 11: 兼勝寺南遺跡 116号住居跡 | 12: 多功南原遺跡 SI-300 |
| 13: 金山遺跡Ⅱ区 SI-001A | 14: 前田遺跡 SI-33 | 15: 大坂遺跡 9号住居跡 | 16: 多功南原遺跡 SI-677 |
| 17: 都賀宮前岡遺跡 SSC-3 | 18: 多功南原遺跡 SI-777 | 19: 金山遺跡 V区 SI-028 | 20: 八幡朝東遺跡 SI-32 |
| 21: 多功南原遺跡 SI-81B | 22: 免の内台遺跡 SI-115 | 23: 多功南原遺跡 SI-060 | 24: 金山遺跡Ⅱ区 SI-002 |
| 25: 宮内東遺跡 12号住居跡 | 26: 滝田本郷遺跡 SI-046 | 27: 乙女不動原北遺跡 17号住居跡 | 28: 宮内東遺跡 12号住居跡 |
| 29: 溝市遺跡 3Z-31号住居跡 | 30: 金山遺跡 V区 SI-003A | 31: 伊勢崎Ⅱ遺跡 SI-32 | 32: 免の内台遺跡 SI-113 |
| 33: 金山遺跡 V区 SI-024A | 34: 御ノ台遺跡第 24号住居跡 | 35: 八幡朝東遺跡 SI-11A・B | 36: 御ノ台遺跡第 11号住居跡 |
| 37: 金山遺跡 V区 SI-026 | 38: 金山遺跡 V区 SI-024A | 39: 金山遺跡 Ⅱ区 SI-92 | 40: 八幡朝東遺跡 SI-01A・B |
| 41: 多田原遺跡 SI-02 | 42: 多田原遺跡 SI-05 | 43: 壬午鉄函遺跡第 4号住居跡 | 44: 滝田本郷遺跡 SI-6 |

第29図 栃木県出土鉄鐙の変遷・消長 (宅間ほか 2011 改変・転載)



第30図 多功大塚山古墳と多功南原1号墳

2. 13号墳 (第27～29図)

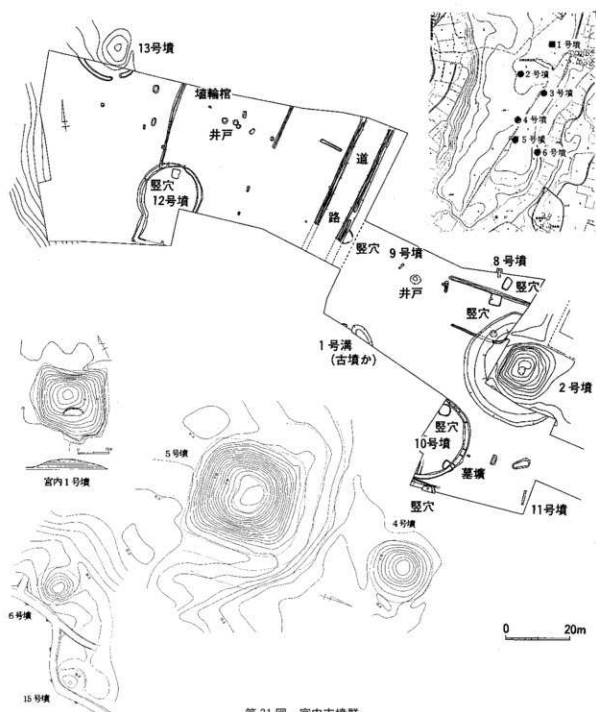
13号墳出土の鉄鏃は平根で、脇扶を有し、鏃身側縁の刃部が平行してのびており、広根の柳葉式になると考える。この類例を探すと、集落出土品では市ノ塚遺跡1区S I-703や多功南原遺跡S I-019などがあるが、6世紀後葉から8世紀中葉までの県内出土品を集成しても稀少であった。多功南原遺跡例は鏃身の幅が狭くて、最も類似しているのは市ノ塚遺跡の鉄鏃である。これが出た堅穴住居跡からは、須恵器も出土しており、TK-209に比定される。また、土師器坏は津野編年IV期(津野1995)になり、須恵器の時期と整合する。一方、県内の古墳から、この形態の鉄鏃は確認できなかったが、集落出土鉄鏃からみると、13号墳はTK-209段階、幅を持たせて7世紀前葉に位置付けることができるであろう。

第3節 栃木県内の方墳

本古墳群13号墳は上述のように、出土した須恵器と鉄鏃から7世紀の終末期の古墳であることが明らかになった。そこで、県内の方墳を集成して規模などを比較してみる。これについては、既に秋元陽光氏が集成されている(秋元2005)。このなかで、後期群集墳の中に終末期的な方墳が築かれる場合と群集墳から離れた位置に単独で方墳が築かれる場合のあることを指摘している。さらにこれらの古墳の時期については、7世紀後半から8世紀に築造されたと考えている。以下、県内の当該古墳を含む古墳群について、分類してみた。

(1) 大型方墳が単独で築かれる場合(第30図)

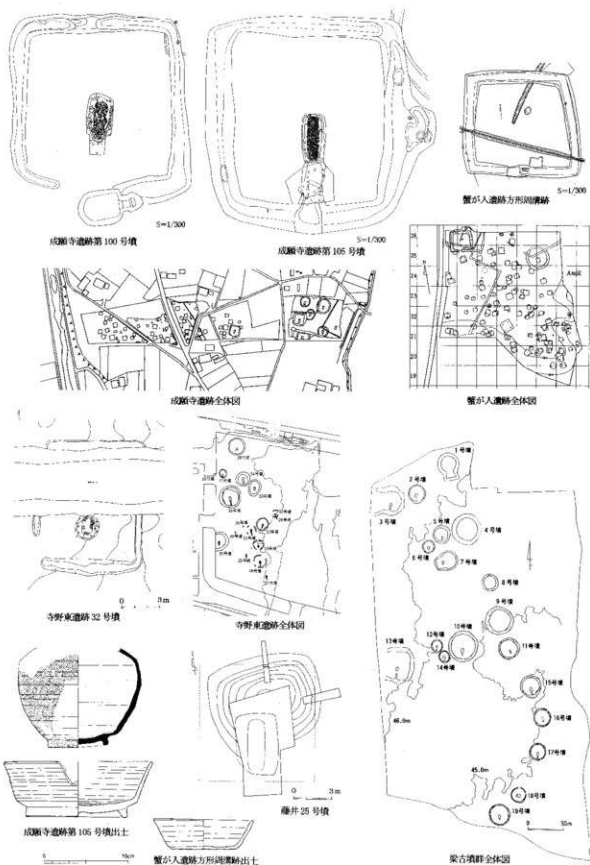
これまでも、栃木県の中央部における終末期の方墳の変遷が捉えられる古墳として多功大塚山古墳・多功南原1号墳が取り上げられてきた。



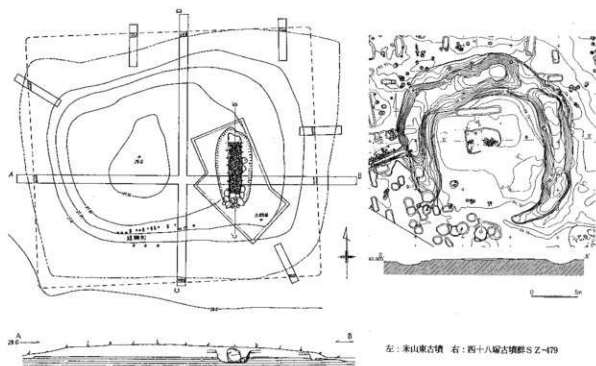
第31図 宮内古墳群

多功大塚山古墳は、周溝内縁下端（墳丘）で一辺53.8m、周溝外縁で64.3mになる。主体部は基礎地業を行い、凝灰岩による載石切組積石室と指摘されている。出土遺物は、7世紀中葉から後葉に位置付けられており、築造は7世紀中葉とされている（秋元2005）。

多功南原1号墳は一辺約27～29mの方墳で、主体部は凝灰岩切石による横穴式石室であった。出土した土師器坏によって7世紀後葉に位置付けられている（秋元2005）。



第32図 栃木県内の後期・終末期方墳



左：米山東古墳 右：西十八塚古墳群S Z-479

第33図 栃木県の後期の方墳

(2) 方墳の規模が大きくて円墳と群集する場合 (第31・32図)

小山市宮内古墳群は、思川右岸の段丘にある。以前は前方後円墳2基を含む20基程の群集墳であったが、現在確認されているのは発掘で確認された古墳を含めて15基である。このうち時期が推測できるのは、発掘された2号墳が5世紀末から6世紀初めで、宮内北遺跡のほかの古墳は後期古墳である。方墳は1号墳が 17×21 m、高さ21 mの規模であるが、時期は明確ではない。5号墳は周溝の確認調査の結果、周溝の外側で一辺49 m前後、墳丘で 35.2×32.6 mの規模であった。墳丘南側に横穴式石室がボーリング探査で確認されており、埴輪もないことから終末期の方墳と考えられている。円墳の墳丘規模は、4号墳が径約20 m、6号墳は径約13 m、15号墳は径約10 mで、発掘された10号墳は周溝の内径約24.6 m、外径約28 mになる。12号墳は前方部幅の広い前方後円墳であるが、墳長30 mに満たない。このように後期の円墳や前方後円墳よりも終末期と目されている5号墳は明らかに規模が大きく、多功大塚山古墳の規模に近い。この古墳群では終末期になり、均質な古墳群から地域の首長墓に展開したとみられる。

梁古墳群は、前方後円墳を含む群集墳である。1・3・7号墳は埴輪を有する前方後円墳で、3・7号墳の主体部は横穴式石室である。13号墳が方墳で、一辺44 mの規模になり、主体部は河原石小口積み横穴式石室である。

(3) 円墳と方墳の規模が均質で群集する場合 (第32図)

成願寺遺跡では円墳群と共に方墳が2基発見された。第100号墳は一辺13.7 mの規模で、主体部は奥壁が凝灰岩切石、側壁は河原石小口積みである。第105号墳は $17.4 \text{ m} \times 16.4 \text{ m}$ の規模で、主体部は奥壁・側壁ともに河原石小口積みと判断されている。前庭部と周溝の接続部から有稜の壺が出土している。高台は低くて、径が大きく、体部が算盤玉の形態でないことから8世紀前半の所産と判断できる。

蟹が入遺跡では、調査区から円墳1基と方墳1基が発見されている。円墳は径約18 mで、体部外面に回

転によるカギ目を施す提瓶が出土しており、後期の古墳である。方墳は、南北16m、東西16～18.5mで、周溝内から須恵器が出ている。重複する住居跡はいずれも古墳時代中期のもので、須恵器は古墳に係わる物であろう。須恵器のうち高台付坏は高台がやや低くて、葎子窯編年では原東1号窯の形態に近い。このことから、8世紀第2四半期を中心とした時期に比定される(津野1997)。方墳は円墳と規模に近いが、出土品は1世紀以上の時間的な隔りがあり、直接繋がるかは近辺の古墳群の変遷が明らかになる必要がある。

寺野東遺跡32号墳は、南北10.5m、東西8.6mで、主体部は河原石小口積みである。周囲の円墳は径16～35m前後であるのに比較すると、本方墳の規模は明らかに小型である。時期を特定できる遺物は出ていないが、耳環が1点出土している。

西高橋遺跡は、寺野東遺跡や梁古墳群と同じく、台地縁辺に造られた群集墳である。寺野東遺跡では中期の群集墳も確認されており、一帯の古墳群が長期にわたっていたと考えられる。方墳は3基確認されているが、詳細は不明である。

藤井25号墳は、かつて69基からなる古墳群の一つである。25号墳の墳丘土は動かされていたが、封土の縁辺が急傾斜で立ち上がっていることが確認でき、一辺9.1mの方墳と判断されている。主体部は胴張りのある横穴式石室で、河原石小口積みであった。遺物は出土していないが、胴張り石室である点から時期が推測される。

成願寺遺跡と蟹が入遺跡の方墳では、8世紀代の須恵器が出土しているが、遺物では時間的な隔絶があり、連続して築造されたのか、出土遺物が追葬時のものであるのか明らかになっていない。今後の課題である。

頼朝塚古墳群では円墳の12号墳が6世紀後葉、方墳の13号墳が7世紀初頭から前葉に築かれたと推定した。このため、円墳と方墳の規模が均質で群集する本類型では、円墳から方墳に墳形が変わった可能性がある。(4) 埴輪のある後期の方墳(第33図)

米山東古墳は長辺約33m、高さ4m内外の長方墳で、墳丘には直線状の埴輪列が確認された。主体部は片袖型で、側壁は割石積みとみられる。埴輪列は上下2段確認され、人物や馬形埴輪も出ている。終末期古墳より遡る方墳である。石室閉塞部の外側から出土土師器坏は扁平な形態で、口径10.6cmになり、7世紀中葉になり、古墳築造時期よりも下る。米山古墳に近いが、群集墳ではない。

四十八塚古墳群SZ-479は、発掘調査した古墳16基のうちの1基で、ほかは円墳である。周溝の外縁は円墳か方墳か判別しがたいが、墳丘側は方形をしており、方墳として扱う。主体部は石灰岩の割石による横穴式石室とみられる。周溝から円筒・朝顔形埴輪片が出土し、墳丘に埴輪が樹立されていた可能性がある。

以上のように、後期・終末期の方墳の在り方を類型化した。首長墓の方墳を除き、多くは時期が不確定であった。頼朝塚古墳群では、円墳よりも方墳がわずかに後出し、これが本県域における後期の円墳から終末期、及び8世紀前半まで使用された方墳の特徴となる可能性がある。そして、後期円墳群と終末期の方墳が比較的均質な規模で続くことが、本県域における終末期古墳の一類型となる可能性がある。その類型は、秋元氏によって提示された薬師寺地域における終末期の方墳による首長墓系列とは対照的な造墓であり、被葬者の性格を反映すると考える。

隣県の茨城県では、方墳がTK-217の時期に出現すると指摘されている(稲村2000)。当該期の古墳は出土遺物が少なく、時期比定も不確定であるが、頼朝塚古墳群13号墳は7世紀初めから前葉の築造と推定しておきたい。7世紀における方墳という墳形の受容が、それ以前の墳丘規模や古墳群の継続性によって多様であり、本県域でも受容の要因解明が、今後の課題である。

参考文献

- 赤熊浩一 1999『木野遺跡Ⅱ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 秋元陽光 1994『上神主茂間神社古墳・多功大塚山古墳』上三川町教育委員会
- 秋元陽光 2005『栃木県における前方後円墳以降と古墳の終末』『第10回 東北・関東前方後円墳研究会大会 前方後円墳以降と古墳の終末 発表要旨資料』
- 伊藤 松ほか 1980『愛知県旗立山西南麓古墳群分布調査報告（Ⅰ）』愛知県教育委員会
- 福村 繁 2000『茨城県における前方後円墳の終焉とその後』『第5回 東北・関東前方後円墳研究会大会 前方後円墳の終焉とその後 発表要旨資料』
- 岩淵一夫・田代 隆 1984『原始・古代』『石橋町史 第1巻 史料編（上）』石橋町
- 内山敏行 1997『律令制成立期の須恵器の系譜 栃木県』『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- 大川 清 1976『下野の古代窯業遺跡（本文編Ⅱ）』栃木県教育委員会
- 大橋泰夫 1997『下野の横穴式石室と前方後円墳』『第7回 東北・関東前方後円墳研究会大会 横穴式石室と前方後円墳 発表要旨資料』
- 大和久義平 1967『藤井古墳群発掘調査報告書』壬生町教育委員会
- 尾野善祐 1994『名古屋市天白区・緑区鳴海地区 須恵器窯跡調査報告書』名古屋市教育委員会
- 小山市立博物館 1993『宮内古墳群調査概報』『小山市立博物館報』第10号
- 小山市立博物館 1994『宮内5号墳墳形確認調査』『小山市立博物館報』第11号
- 加藤 修ほか 1987『多摩ニュータウン№.513 遺跡』『多摩ニュータウン 昭和60年度（第4分冊）』（財）東京都埋蔵文化財センター
- 木本元治・福島雅義 1988『善光寺遺跡』『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 栗原有未・松浦真由美 2003『ムジナ塚遺跡』佐野市教育委員会
- 後藤健一 1989『湖西古墳群の須恵器と窯構造』『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）本文編』静岡県教育委員会
- 小林三郎 1975『米山東古墳』『佐野市史 資料編1』佐野市
- 齋藤孝正ほか 1983『愛知県古墳群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）』愛知県教育委員会
- 城ヶ谷和広 2008『鎮投票・尾北郡における窯業生産体制』『日本考古学協会 2008年度愛知大会 研究発表資料集』
- 藤原浩恵ほか 2000『成願寺遺跡』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 藤藤敏雄・村田沙織 2012『菅田古墳群』栃木県教育委員会・（財）とちぎ未来づくり財団
- 鈴木一男 1985『宮内北遺跡緊急発掘調査報告書』小山市教育委員会
- 鈴木一男 1993『宮内北遺跡』『第4回収蔵展 小山の遺跡2—10年間の発掘成果—』小山市立博物館
- 宅間清公・津野 仁・藤原 智・山口耕一 2013『栃木県の古代生業』『一般社団法人 日本考古学協会 2011年度栃木大会 研究発表資料集』
- 津野 仁 1995『栃木県における6・7世紀の土器編年と地域的特徴』『東国土器研究』第4号
- 津野 仁 1997『栃木県の須恵器編年』『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- 津野 仁 1998『寺野東遺跡Ⅳ（古墳時代墳墓編）』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 津野 仁 2011『寂光武窯跡』栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 津野 仁・山口耕一・内山敏行・池田敏宏 2004『三義山麓古墳群の須恵器生産（Ⅱ）—前半期の様相を中心として—』『栃木県考古学会誌』第24集
- 鶴岡正昭ほか 1993『多摩ニュータウン№.342 遺跡』『多摩ニュータウン 平成3年度（第5分冊）』東京都埋蔵文化財センター
- 天笠洋一 1994『長千谷遺跡群—山去須恵器窯跡—』『市内遺跡X』太田市教育委員会
- 中村享史 1996『安塚坂下古墳群』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 仲山英樹ほか 2011『四十八塚古墳群』栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

第4章 総括

- 野口静男 1993「西高橋遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔平成3年度〕』栃木県教育委員会
- 橋本澄朗ほか 1992「古墳時代」『南河内町史 史料編1 考古』南河内町
- 常陸古代農業史研究会 1998「水戸市山田黒路雑詠調査報告」『茨城県考古学会誌』第10号
- 藤岡市教育委員会 2005『G1 藤岡市下日野金井塚地群 G4 金山下遺跡・金山下古墳群・G3 平井砦城』
- 福田定信 1993「梁古墳群」『第4回収蔵展 小山の遺跡2－10年間の発掘成果－』小山市立博物館
- 松浦宥一郎 1981「宮内古墳群」『小山市史 史料編 原始古代』小山市
- 関宮正光 2002『和田黒路』岩舟町教育委員会
- 三鑫窯跡研究会 2009「三鑫山麓窯跡群の須恵器生産（Ⅲ）－岩舟町和田黒路出土須恵器の再検討（報告編）－」『栃木県考古学会誌』第30集
- 三鑫窯跡研究会 2011「三鑫山麓窯跡群の須恵器生産（Ⅳ）－岩舟町和田黒路出土須恵器の再検討（考察編）－」『栃木県考古学会誌』第32集
- 水野順敏 1989『栃木県二宮町 蟹が入遺跡』二宮町教育委員会
- 森田久男・柳川 宏 1981「牧ノ内古墳群」『小山市史 史料編 原始古代』小山市
- 山口耕一 1999『多功南原遺跡（奈良・平安時代編）第3分冊』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 吉田 哲 2011『千駄塚茂間遺跡・栗宮宮内遺跡』栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 渡辺 一ほか 1988『鳩山窯跡群Ⅰ―窯跡編（1）―』鳩山窯跡群遺跡調査会

写 真 图 版



頼朝塚古墳群 遠景（南西上空から）



頼朝塚古墳群 遠景（西上空から）



12号墳 全景（南上空から）



12号墳・13号墳 全景（南上空から）



12号墳 全景（北から）



12号墳 全景 (東上空から)



12号墳 全景 (東から)



12号墳 周溝 土器出土状況 (西から)



12号墳 南斜面 土器出土状況 (南から)



12号墳 主体部 裏込め 粘土出土状況 (南から)



12号墳 主体部 南北セクション（西から）



12号墳 主体部 底面粘土分布状況（南から）



12号墳 主体部 裏込め（南から）



12号墳 周溝セクション（西から）



12号墳 東西セクション（南から）



12号墳 主体部 掘方完掘（西から）



12号墳 主体部 掘方完掘（南から）



12号墳 勾玉出土状況

図版四
13号墳
遺構



13号墳 近景 (南上空から)



13号墳 主体部 天井石出土状況 (北から)



13号墳 主体部 天井石出土状況 (南東から)



13号墳 主体部 礎出土状況 (南から)



13号墳 主体部 完掘 (南から)



13号墳 主体部 (南から)



SK-03 セクション (西から)



SK-03 完掘 (西から)



SK-04 セクション (南から)



SK-04 完掘 (南から)

図版六
12号墳
出土遺物





(レントゲン写真)

図版八
12号墳 出土遺物



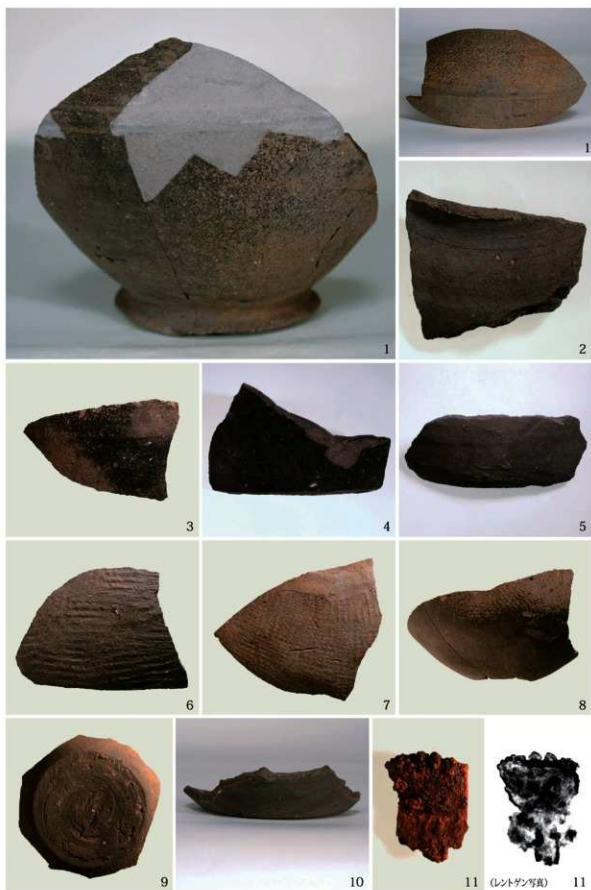
31



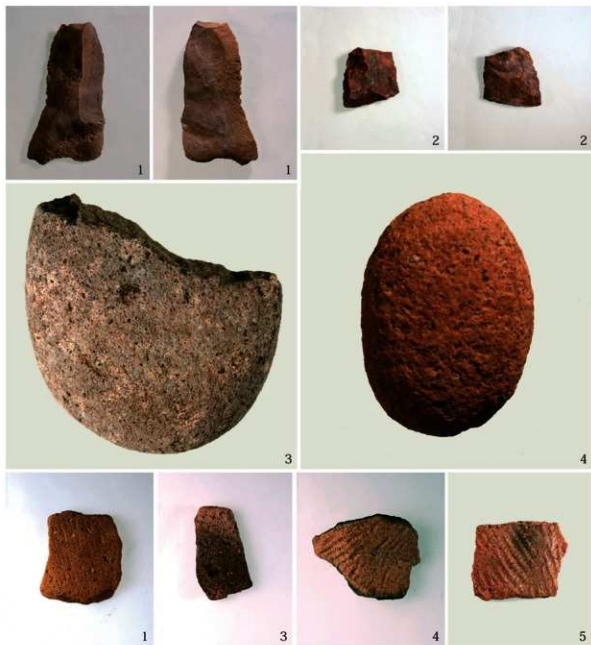
31



31内面



図版一〇 石器・縄文土器



報告書抄録

ふりがな	よりともづかこふんぐん
書名	頼朝塚古墳群
副書名	快適な道づくり事業費（補助）主要地方道宇都宮茂木線市塙工区に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第365集
編著者名	津野 仁
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市柴474番地 TEL0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2014年3月25日（平成26年3月25日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
頼朝塚 古墳群	市貝町 市塙	22	7255	036° 32' 85"	140° 6' 90"	20100805 ～20110330	2,400 ㎡	主要地方道 宇都宮茂木 線市塙工区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
頼朝塚古墳群	古墳	古墳時代	方墳1基、円墳1基	須恵器（高台付坏・蓋、坏、壺、甕）、 勾玉、鉄鏝 縄文土器・石器	後期～終末期 の古墳。
	集落	縄文時代	陥し穴2基		

要約	<p>頼朝塚古墳群中の2基の古墳を調査した。12号墳は円墳で、13号墳は方墳である。両墳とも主体部は著しく壊されていたが、破砕礫の形状から凝灰岩切石積であったと推定された。13号墳では天井石と考えられる石が確認された。</p> <p>出土品は少なかったが、12号墳の主体部脇より、須恵器がまとまって出土した。また、周囲から出土甕は古墳に供献されたものであろう。</p> <p>古墳の築造時期は12号墳が鉄鏝や甕の叩き具により6世紀後葉、13号墳は鉄鏝により7世紀前葉と考えた。このため、本古墳群は円墳から方墳に変化したとみられる。県内の方墳の様相をみると、単独の大型方墳で首長墓、円墳と群集する場合などがある。本古墳群は、古墳の規模が均質で、円墳から方墳に変わる類型と捉えられた。</p>
----	--

栃木県埋蔵文化財調査報告第365集

頼朝塚古墳群

—快適な道づくり事業費（補助）
主要地方道宇都宮茂木線市塚工区に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 栃 木 県 教 育 委 員 会

宇都宮市塚田1-1-20

T E L . 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町1-8

T E L . 028 (643) 1011

平成26年3月25日発行

編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

T E L . 0285 (44) 8441

印刷 下野印刷株式会社
